

有 価 証 券 報 告 書

事業年度 自 2018年4月1日
(第117期) 至 2019年3月31日

ラサ商事株式会社

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

第117期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	7
第2 【事業の状況】	8
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	8
2 【事業等のリスク】	10
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	11
4 【経営上の重要な契約等】	14
5 【研究開発活動】	14
第3 【設備の状況】	15
1 【設備投資等の概要】	15
2 【主要な設備の状況】	15
3 【設備の新設、除却等の計画】	15
第4 【提出会社の状況】	16
1 【株式等の状況】	16
2 【自己株式の取得等の状況】	19
3 【配当政策】	20
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	21
第5 【経理の状況】	34
1 【連結財務諸表等】	35
2 【財務諸表等】	68
第6 【提出会社の株式事務の概要】	78
第7 【提出会社の参考情報】	79
1 【提出会社の親会社等の情報】	79
2 【その他の参考情報】	79
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	80

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月26日

【事業年度】 第117期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 ラサ商事株式会社

【英訳名】 Rasa Corporation

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 井 村 周 一

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目11番5号 RASA日本橋ビルディング

【電話番号】 03-3668-8231(代表)

【事務連絡者氏名】 常務取締役管理本部長 窪 田 義 広

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目11番5号 RASA日本橋ビルディング

【電話番号】 03-3668-8231(代表)

【事務連絡者氏名】 常務取締役管理本部長 窪 田 義 広

【縦覧に供する場所】 株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
ラサ商事株式会社 大阪支店
(大阪市北区中之島二丁目2番2号 大阪中之島ビル)
ラサ商事株式会社 名古屋支店
(名古屋市中区錦一丁目11番20号 大永ビル)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第113期	第114期	第115期	第116期	第117期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	28,034	30,523	29,937	29,076	31,755
経常利益	〃	1,443	1,492	1,639	2,057	2,264
親会社株主に帰属する 当期純利益	〃	847	944	1,348	1,514	1,608
包括利益	〃	955	808	1,471	1,682	1,454
純資産額	〃	11,421	12,045	12,963	15,698	15,871
総資産額	〃	29,343	28,486	27,751	29,487	31,854
1株当たり純資産額	円	998.65	1,051.35	1,192.16	1,257.55	1,369.24
1株当たり 当期純利益金額	〃	74.08	82.58	119.52	133.42	132.41
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額	〃	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	38.9	42.3	46.7	53.2	49.8
自己資本利益率	〃	7.7	8.1	10.8	10.6	10.2
株価収益率	倍	8.2	7.0	6.0	6.8	6.2
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	△48	82	3,837	2,174	△460
投資活動による キャッシュ・フロー	〃	△486	81	△1,385	△524	△147
財務活動による キャッシュ・フロー	〃	1,976	△478	△2,743	△168	△326
現金及び現金同等物 の期末残高	〃	3,374	3,059	2,768	4,249	3,315
従業員数	名	245	245	248	258	270

- (注) 1. 第113期において、新たに取得した連結子会社のみなし取得日を2014年12月末としており、新連結子会社の業績は、2015年1月1日から2015年3月31日までの期間を連結しております。
2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
4. 第115期より、役員向け株式交付信託が保有する当社株式を純資産の部において自己株式として計上しております。なお、1株当たり純資産額の算定上の基礎となる普通株式の期末株式数は、当該株式を控除対象の自己株式に含めて算出しております。また、1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎となる普通株式の期中平均株式数は、当該株式を控除対象の自己株式に含めて算定しております。
5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第117期の期首から適用しており、第116期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第113期	第114期	第115期	第116期	第117期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	19,583	19,983	18,790	18,451	19,887
経常利益	〃	1,107	979	986	1,423	1,514
当期純利益	〃	665	602	653	962	1,020
資本金	〃	1,854	1,854	1,854	2,076	2,076
発行済株式総数	千株	12,400	12,400	12,400	12,910	12,910
純資産額	百万円	10,409	10,705	10,938	13,110	12,710
総資産額	〃	18,855	18,230	17,586	18,882	20,241
1株当たり純資産額	円	904.39	930.12	997.30	1,042.31	1,087.66
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額)	〃 (〃)	15.00 (7.50)	15.00 (7.50)	24.00 (7.50)	33.00 (15.00)	34.00 (16.50)
1株当たり 当期純利益金額	〃	57.79	52.34	57.46	84.11	83.37
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益金額	〃	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	55.2	58.7	62.2	69.4	62.8
自己資本利益率	〃	6.6	5.7	6.0	8.0	7.9
株価収益率	倍	10.5	11.0	12.5	10.7	9.9
配当性向	%	26.0	28.7	41.8	39.2	40.8
従業員数	名	181	184	188	183	185
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX)	% (〃)	132.6 (130.7)	129.2 (116.5)	164.4 (133.7)	210.9 (154.9)	202.1 (147.1)
最高株価	円	645	639	792	1,196	1,040
最低株価	〃	453	506	450	685	742

- (注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。
2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。
4. 第115期より、役員向け株式交付信託が保有する当社株式を純資産の部において自己株式として計上しております。なお、1株当たり純資産額の算定上の基礎となる普通株式の期末株式数は、当該株式を控除対象の自己株式に含めて算出しております。また、1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎となる普通株式の期中平均株式数は、当該株式を控除対象の自己株式に含めて算定しております。
5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第117期の期首から適用しており、第116期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

1939年1月	ラサ工業株式会社の製品を販売する目的を以て、資本金10万円で東京都中央区京橋にラサ商事株式会社を設立。
1945年12月	大阪支店を開設。
1950年2月	本社を東京都中央区日本橋茅場町に移転。
1952年10月	食糧庁(現農林水産省)輸入食糧取扱商社の指定を受ける。
1958年8月	日曹製鋼株式会社(現大太平洋金属株式会社)と“ニッソ・ワーマンポンプ”の総販売代理店契約を締結し、販売を開始する。
1961年11月	当社はラサ工業株式会社の関連会社ではなくなる。
1961年12月	当社は日曹製鋼株式会社(現大太平洋金属株式会社)の関連会社となる。
1969年11月	ウェストラリアンサンド社(現アイルカ社・オーストラリア)とジルコンサンド輸入販売代理店契約締結(1978年1月総販売代理店契約締結)。
1974年1月	建設省(現国土交通省)建設業許可(特定建設業)を受ける。
1975年8月	東京機械センターを開設。
1979年5月	ヒドロスタル社(スイス)と“ヒドロスタルポンプ”輸入販売契約を締結。
1981年4月	名古屋営業所を支店に昇格。
1982年10月	ラサ工業株式会社製のシールド掘進機販売を開始。
1984年7月	大太平洋金属株式会社が太平洋機工株式会社を設立。これに伴い“ニッソ・ワーマンポンプ”の総販売代理店契約の相手先は大太平洋機工株式会社に変更。同時に当社は出資し、大太平洋機工株式会社は当社の関連会社となる。
1986年7月	大太平洋機工株式会社と“タカサゴPAMポンプ”の総販売代理店契約を締結。
1987年6月	大太平洋機工株式会社と“ヒドロスタルポンプ”の総販売代理店契約を締結(ヒドロスタル社(スイス)と大太平洋機工株式会社との技術提携契約による)。
1989年2月	プツマイスター社(ドイツ)と高圧ピストンポンプ等の総販売代理店契約を締結。
1993年4月	福岡営業所を支店に昇格。
1998年11月	本社を東京都中央区日本橋箱崎町に移転。
2001年4月	当社は大太平洋金属株式会社の関連会社ではなくなる。
2001年4月	北海道営業所(現札幌支店)、仙台営業所及び広島営業所を支店に昇格。
2003年4月	横浜営業所を支店に昇格。
2006年2月	東京証券取引所市場第二部に上場。
2006年9月	アルファトレーディング株式会社を吸収合併。
2007年3月	東京証券取引所市場第一部銘柄へ指定。
2007年4月	上海駐在員事務所を開設。
2011年10月	東京都中央区蛸殻町に本社ビル建設。本社の移転並びに横浜支店を本社営業部門へ統合。
2012年1月	イズミ株式会社(現連結子会社)の株式を取得。
2014年3月	イズミ株式会社(現連結子会社)を株式交換により完全子会社化。
2014年4月	シンガポール駐在員事務所を開設。
2014年12月	旭テック株式会社(現連結子会社)を子会社化。
2015年2月	ラサ・リアルエステート株式会社(現連結子会社)を新設分割により設立。
2017年4月	シンガポール駐在員事務所を支店に昇格。

3 【事業の内容】

当社グループ(当社及び当社の子会社)は、資源・金属素材関連事業、産機・建機関連事業、環境設備関連事業、プラント・設備工事関連事業、化成品関連事業及び不動産賃貸関連事業の6事業を柱に事業を展開しております。

当社グループの事業における当社及び当社の関係会社の位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。なお、以下に示す区分は、セグメントと同一の区分であります。

〔資源・金属素材関連〕

ジルコンサンドを中心とする鉱産物、その他物資等の輸出入及び販売を行っております。ジルコンサンドは世界有数のミネラルサンズ(注)の生産会社であるアイルカ社(オーストラリア)と日本における総販売代理店契約を締結しており、安定して商品を確認して販売しております。ジルコンサンドの用途は耐火材、鑄造用鑄型、半導体チップの鏡面加工研磨材から、スマートフォン・タブレットPCのタッチパネルなどに用途が広がっております。

近年は、金属シリコン、ジルコニア、アルミナの輸入拡大を図り、金属シリコンはアルミニウムの二次精錬添加剤や二次電池向け原料として、ジルコニアは高級耐火物やセラミックス向け原料として、アルミナは高級耐火物やコーティング素材として、国内各社へ販売しております。

(注) ミネラルサンズとは砂状の鉱産物のことです。

〔産機・建機関連〕

産機関連では、顧客のニーズに合わせて、水からスラリー液(注)、腐食性液、高濃度・高粘性液まで広範囲の流体に対応できる流送機器等の販売・メンテナンス等を行っております。国内外の多くの機械メーカーと総販売代理店契約を締結しており、顧客のニーズを踏まえてメーカーの新商品の開発や製品の改善等に協力しております。

なお、大平洋金属グループ企業が出資する機械メーカーである大平洋機工株式会社には当社も出資しており、同社と総販売代理店契約を締結し同社製品の販売等を行っております。

当社グループは顧客の立場に立ち、メンテナンスが容易で長期間の使用が可能なものを取扱い商品の中心としております。特に、主力のワーマンポンプ(大平洋機工株式会社製)は必要部品の交換により長期に使用できるだけでなく、ポンプの分解・組立が容易で、工場に持ち込まずにその場で簡単にメンテナンスを行うことができる点に加え、取扱溶液の性状に適応した様々な材質を選定して組立てられる特徴を有しております。1958年オーストラリア・ワーマン社より日本導入以来60年にわたり、耐食・耐磨耗ポンプのトップクラスのシェアを維持し、時代の変遷はあっても製鉄、精錬等の素材産業から半導体、パネル等のIT関連企業まで幅広く使用されております。

建機関連では各種小型建設機械、耐震管施設用機器の販売、シールド掘進機及び関連機器等の販売・レンタル・メンテナンス等を行っております。

(注) スラリー液とは固形物を含む液体のことです。

〔環境設備関連〕

ドイツより優れた性能を持つ高圧ポンプ群(プツマイスター社製ピストンポンプ、フェルバ社製ダイアフラムポンプ、ウラカ社製プランジャーポンプ)を輸入し、バイオマスガス発電・下水汚泥・産業廃棄物処理・高濃度スラリー送り・表面処理の用途に国内で販売を行っておりますが、これらの高性能高圧ポンプを利用した新技術を提案し、環境分野での新しい販路拡大を図っております。

また、当社が独自技術を保有する水砕スラグ製造設備「ラサ・システム」の販売及び既存システムの改修・改造にも積極的に取組んでおります。

同システムは製鉄所の高炉(溶鉱炉)から銑鉄生産時に副産物として発生する熔融スラグを高圧水で粒状化(水砕化)する設備で、スラグ中に含まれる硫化水素の大気中への飛散を減少させるとともに、セメント原料として資源の再利用に貢献しております。国内の製鉄所のみならず海外にもプラントを多数納入している実績があります。

最近では製鉄所だけでなく、この技術を応用した石炭ガス化複合発電(IGCC)用スラグ処理設備を2物件受注しており、2020年、2021年の運転開始を目指し順調に製作を進めております。

〔プラント・設備工事関連〕

石油精製、石油化学、ガス関連、クリーンルーム関連、各種工場関連、都市部大型空調設備関連等の多種多様な分野のプラント及び関連工事に係る設計、施工及びメンテナンス工事を主たる事業としております。また、プラント及び関連工事の中でも配管工事及び動機械仕上工事(注)を得意としており、自社工場での加工率を高め、現場作業を削減し、高品質で低コストの工事を提供しております。

2017年3月に稼動した新工場は、取引先の認知度も上がり、水分を嫌う配管工事や特殊材質の配管工事、大径管のプレファブなど工事規模を最大限に活かした受注をしており、同業他社との差別化を図っております。

(注) 動機械仕上工事とは、ポンプやコンプレッサー等の組立やメンテナンスのことです。

〔化成品関連〕

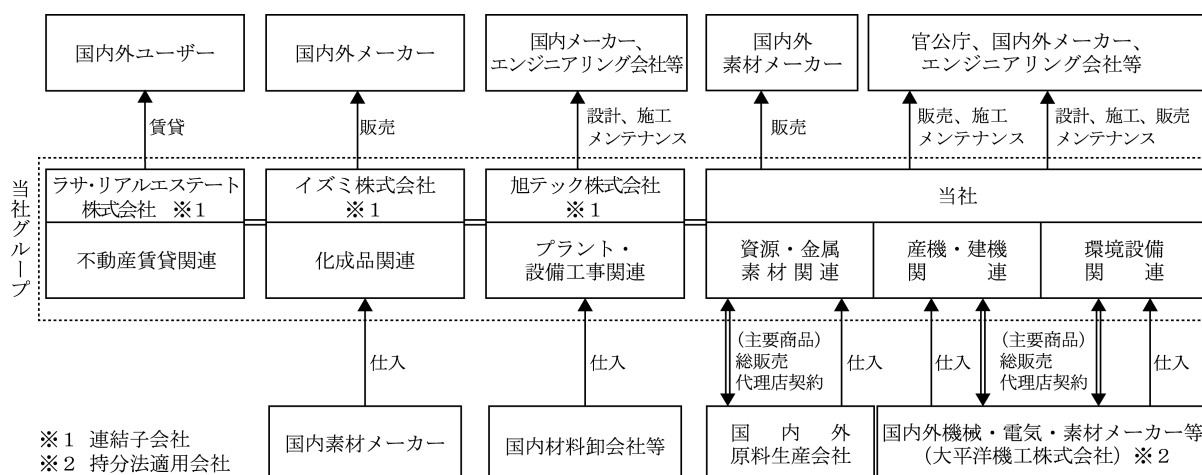
合成樹脂・化成品関連の事業であり、自動車関連をはじめ、建材、電気、電子分野などの幅広い業界に多種多様な合成樹脂・化学製品を販売しております。

〔不動産賃貸関連〕

当社グループで保有する不動産を有効活用し、賃貸収益を確保しております。保有している物件は、付加価値の高い都市部で好条件のものが中心であり、堅実かつ優良なテナントへ賃貸しております。

事業系統図は次のとおりです。

（事業系統図）



※1 連結子会社
 ※2 持分法適用会社

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な 事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社)					
イズミ株式会社	東京都中央区	73	化成品関連	100.0	合成樹脂、化学品の販売
旭テック株式会社	千葉県袖ヶ浦市	100	プラント・ 設備工事関連	100.0	プラント及び関連工事の 施工、メンテナンス
ラサ・リアルエステート 株式会社	東京都中央区	490	不動産賃貸関連	100.0	グループ保有不動産の有 効活用及び高付加価値化
(持分法適用関連会社)					
大平洋機工株式会社	千葉県習志野市	490	産機・建機関連	45.5	ポンプ類の購入及び原材 料の販売 役員の兼任 1名

- (注) 1. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。
 2. ラサ・リアルエステート株式会社は特定子会社であります。
 3. イズミ株式会社及び旭テック株式会社については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等

イズミ株式会社	① 売上高	6,608百万円
	② 経常利益	151 "
	③ 当期純利益	97 "
	④ 純資産額	1,350 "
	⑤ 総資産額	2,649 "
旭テック株式会社	① 売上高	5,037百万円
	② 経常利益	267 "
	③ 当期純利益	174 "
	④ 純資産額	1,932 "
	⑤ 総資産額	5,555 "

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(2019年3月31日現在)

セグメントの名称	連結従業員数(名)
資源・金属素材関連	9
産機・建機関連	121
環境設備関連	28
プラント・設備工事関連	66
化成品関連	17
不動産賃貸関連	2
全社(共通)	27
合計	270

(注) 1. 従業員数は、当社グループから当社グループ外への出向者を除き、当社グループ外から当社グループへの出向者を含む就業人員数であります。

2. 全社(共通)は、当社の総務人事及び経理等の管理部門の従業員であります。

(2) 提出会社の状況

(2019年3月31日現在)

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
185	43.3	14.2	7,181,490

セグメントの名称	従業員数(名)
資源・金属素材関連	9
産機・建機関連	121
環境設備関連	28
全社(共通)	27
合計	185

(注) 1. 従業員数は、当社から他社への出向者を含む就業人員数であり、派遣社員を除いております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 全社(共通)は、総務人事及び経理等の管理部門の従業員であります。

(3) 労働組合の状況

・当社の労働組合は、1974年6月に結成され、現在の組合員は、76人であります。

なお、連結子会社3社には労働組合はありません。

・労働組合との間には、特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであり、その実現を保証するものではありません。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループの企業理念は「世界に通用する一流技術商品と有用な価値ある資源を国内外に販売し、豊かな社会に貢献すること」です。これからも当社グループのような伝統型企業がさらなる発展を遂げるために、新たなコア・コンピタンスを創造・育成することにより、会社の永続的な発展とさらなる飛躍を目指してまいります。このために、下記の経営基本方針をもって今後の事業を展開してまいります。

- ① コーポレート・ガバナンスを機能させるために、リスクマネジメントの徹底とコンプライアンスの強化を図ります。
- ② 経営資源の選択と集中により経営効率を高め収益の一層の拡大を図ります。
- ③ 高度の商品知識や技術力を持つ人材の育成に注力し、人的基盤の充実を図ります。
- ④ 自己資本の一層の充実を図り、財務基盤を強化し、新たな投資・事業拡大への即対応体制を強化します。

(2) 中長期的な会社の経営戦略

2019年5月、当社は2022年3月期を最終年度とする中期経営計画「Value Up Rasa 2021～企業価値の創造～」を発表いたしました。

当中期経営計画においては、最終年度(2022年3月期)売上高350億円、営業利益23億円、経常利益25億円、当期純利益17億30百万円を経営目標に掲げ、3つの基本方針のもと、5つの重点施策を推し進めることにより、経営目標の達成及び企業価値向上を目指します。

基本方針

- ① 専門商社の枠組みを超えて、社会のインフラを支える付加価値創出企業として、持続的な成長を目指します。
- ② 重点施策の推進を通じて業績拡大を図り、企業価値の向上を目指します。
- ③ 資本コストを意識した経営をベースに、配当方針の見直しを行い、株主価値の極大化に努めます。

重点施策

- ① グループの各事業における収益基盤の強化
- ② グループ企業間及び各事業間の連携強化とシナジーの拡大
- ③ ESGを意識した事業展開
- ④ コーポレート・ガバナンスの高度化
- ⑤ 経営基盤の強化

(3) 目標とする経営指標

当社グループは、財務の健全性を念頭におきながら、自己資本を効率的に活用しつつ、株主価値の拡大を図ることを主眼に、2021年度での達成を目指す経営指標を下記の通り掲げております。

- ① 自己資本当期純利益率(ROE)は9%以上
- ② 売上高営業利益率は6%以上
- ③ 自己資本比率は50%以上

(4) 会社の対処すべき課題

当社グループは、資源・金属素材関連、産機・建機関連、環境設備関連、プラント・設備工事関連、化成品関連、不動産賃貸関連の6事業体制で、収益のさらなる拡大を図ると共に、新商品の開発、開拓、グローバル化を積極的に推進し、新たな収益基盤の確立を目指してまいります。

① 資源・金属素材関連

ジルコニウムを中心とした鉱産物を主に国内に安定的に供給してきましたが、これらの原料の用途が限定的であること、供給元の状況に左右されやすいこと、国内外の景気の影響を大きく受けること、価格面及び為替リスクがあることなどから、下記事項を中長期的な課題として取り組んでまいります。

- ・輸入原料の商品多様化と用途開発

取扱商品の拡大を目指し、引き続きジルコンサンド、金属シリコン、黒鉛などの高付加価値化を目指してまいります。

- ・グリーンエネルギー分野の拡大

エネルギー用途素材の原料供給への取組みに加え、太陽光発電のパネル向け原材料、二次電池用の原材料、省エネ電子部材料などグリーンエネルギー分野へ注力してまいります。

- ・海外事業展開の拡大

中国、東南アジア、インドなどの成長市場へ進出している日系企業及び現地企業との取引拡大を目指してまいります。加えて、輸入原料の安定的なサプライソースの基盤強化に注力してまいります。

② 産機・建機関連

民需関連については、設備投資は徐々に減速していると判断されます。一方、官需関連については安定的であるものの予算の執行が公共インフラの長寿命化にシフトされている状況です。この状況下、さらに顧客の視点に立脚した提案力が求められており、下記事項を中長期的な課題として取り組んでまいります。

- ・既存ポンプの応用と新材質の開発

ポンプの用途開発については、従来より石炭火力発電、下水道のBCP分野に取り組んでまいりました。石炭火力発電については、重要なベースロード電源の一つではあるものの、2015年のパリ協定採択を機に漸次設備縮小の方向にあります。従いまして、今後の取組みについては、石炭火力発電所に納入する全てのポンプの部品材質の長寿命化を図ることで、環境負荷の低減に貢献してまいります。

一方、下水道BCPについては、当社主力商品のヒドロスタルポンプを応用し、津波、高潮、豪雨等の自然災害から下水道施設等を保護する目的で「BETSY」を供給しております。その用途範囲は極めて広く、民間需要にも多くの応用が可能なことから、徐々に実績が増加しております。

また、主力のワーマンポンプについては、画期的なポンプ材質の開発を進めており、より顧客のニーズにマッチした低コストで高品質の金属及びゴム材質の提供を進めてまいります。

- ・メンテナンスサービス体制の一層の充実

グループでの連携により、メンテナンス協力会社との関係強化に努め、稼動ポンプ診断サービスを通じて顧客需要を喚起し、グループでの販売、メンテナンス需要の拡大を目指してまいります。

- ・グループ各社との連携強化

旭テック株式会社との連携営業を強化し、特に京葉地区における相互の顧客に対する情報共有と官需営業の推進強化を目指してまいります。また、当社の主力ポンプメーカーであり、関連会社でもある大平洋機工株式会社との協業体制も含めグループ全体の業容拡大を目指してまいります。

③ 環境設備関連

製鉄所の高炉から排出されるスラグの処理は、高炉の老朽化に伴い改修工事が順次計画されております。しかしながらその工事規模は、既設設備を最大限活用する限定的な内容であり、競争も激化しております。この状況下、製鉄所以外の需要が見込まれる火力発電設備の実績をベースに、下記事項を中長期的な課題として取り組んでまいります。

- ・電力分野におけるスラグ処理の応用及び販路拡大

国内ではCO₂削減を重視した次世代火力発電の石炭ガス化複合発電設備(IGCC)に組み込まれたスラグ処理設備(「ラサ・システム」応用技術)を2物件受注しており、2020年、2021年の運転開始を目指し、順調に製作を進めております。さらにこの技術・設備を大手発電プラント向けに拡販し、CO₂削減に貢献してまいります。

- ・当社独自の水砕スラグ製造設備「ラサ・システム」の販売先の拡大

環境への負荷を低減させる水砕スラグ製造装置「ラサ・システム」で生じるスラグは、リサイクル材として評価されております。今後は、さらなる省エネルギー化を目指した技術提案及びこのシステムを応用した非鉄金属分野への市場拡大を目指してまいります。

- ・環境問題に取り組む海外主要機械メーカーとの提携

バイオマスガス発電の利用促進に向けて乾式メタン発酵が注目されています。発酵槽に圧入するポンプとして実績を評価されています。また高圧で下水汚泥、産廃送りに多数実績を持つドイツ高圧ポンプメーカーとの連携を強化してまいります。さらにボイラー制御に不可欠な高い制御性に加え、シンプルで、信頼性の高い自動バイパス弁メーカーとの連携を強化し、次期商品として蒸気減温器の商品化を図り、新たな市場の創出と拡大を目指してまいります。

- ・海外市場の拡大

非鉄金属資源の豊富な東南アジアを中心に、水砕スラグ処理の応用技術を活用した設備及び機械類の輸出強化を目指してまいります。

- ④ プラント・設備工事関連

石油化学業界の再編から新規の大型設備投資の減少が見込まれますが、エネルギー関連事業の設備投資の安定的な継続が見込まれることや、工事のスペシャリストが減少している状況のなか、これらを養成する人材育成と業容拡大に向けた取扱業務の間口拡大が必要なことから、下記事項を中長期的な課題として取り組んでまいります。

- ・国内製造設備の増改修・補修及び新設

主要顧客の京葉臨海コンビナートの新設、増改修、定期修繕の受注及びエネルギー関連、特に「火力発電」「バイオマス発電」「地冷」（注）関連への取り組みを強化し、受注を目指してまいります。

（注）「地冷」とは、地域冷暖房のことで、一定地域内の建物群に熱供給設備（地域冷暖房プラント）から、冷房・暖房・給湯などを行うシステムで、エネルギー利用の効率化を図るものです。

- ・事業の間口拡大

公共工事、特に下水道事業への取り組みを強化してまいります。

- ・人材育成

建設業の人員減少が続くなか、特殊材質配管工事やポンプメンテナンスなどのスペシャリストの養成は避けて通れない状況であり、会社の体制や働き方の改革を進め、足腰の強い体質を目指してまいります。

- ・グループ連携

営業活動やポンプメンテナンス工事などで連携を行っておりますが、更に下水道事業においても連携を強化し、シナジー効果を図ってまいります。

- ⑤ 化成品関連

石油化学製品工場の海外移転などから、国内における生産量、消費量とも減少傾向にあるため、国内企業とその海外現地法人への関係強化が必要なことなどから、下記事項を中長期的な課題として取り組んでまいります。

- ・国内取引の拡大

国内の一流メーカー及び特徴ある製品を持つメーカーとの関係強化を進め、販売先への水平展開を行い、売上、収益の拡大を目指してまいります。

- ・海外取引の拡大

主要取引先の海外展開に伴い、海外駐在員事務所を情報拠点として、東南アジア及び北米への販売強化並びに三国間ビジネスを推進してまいります。

- ・グループ運営強化及び効率化

海外販売の拡大により、グループでの運営強化及び販売コストなどの効率化に努めてまいります。

- ⑥ 不動産賃貸関連

保有不動産のより収益性の高い物件への買換えはほぼ完了し、安定的な賃料収入を得られております。残された課題として、上尾市の賃貸駐車場の有効活用を検討してまいります。

2 【事業等のリスク】

当社グループの事業その他に関するリスクについて、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております。ただし、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資者の判断において重要であると考えられる事項については、積極的な情報開示の観点から開示しております。

本項においては、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は有価証券報告書提出日現在における当社の判断に基づいたものであり、その実現を保証するものではありません。

(1) 商品市況の変動について

当社グループが資源・金属素材関連及び化成品関連において取り扱う商品は、相場変動による商品価格リスクがあります。資源・金属素材関連においては、在庫として保有する期間を短縮させるとともに、商品によっては年間の販売量を事前に交渉するなどしてリスクの軽減を図っております。資源・金属素材関連及び化成品関連とも短期的に想定以上の相場変動が生じた場合等には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 為替相場の変動について

当社グループの外貨建てによる販売、仕入については、為替相場の変動によるリスクを負っておりますが、当該リスクを減少させるために原則として取引契約成立の都度、為替予約を行っております。したがって、短期的な為替変動が当社の業績に与える影響は軽微なものであると考えられますが、想定以上の為替変動が生じた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 経済・設備投資動向について

当社グループが産機・建機関連及び環境設備関連において取り扱う商品並びにプラント・設備工事関連は、製造業を主体とした顧客の工場や地方自治体等の運営する下水処理場等において主に使用又は施工されております。当該事業は機械や設備の販売及び工事施工のみならず、メンテナンス関連の需要も継続的にあること、また、製造業を主体とした民需においては、当社グループの顧客は幅広い業種に亘っていることから、競合激化はあるものの、一定の収益の安定性は確保できているものと考えております。しかしながら、全般的な経済動向や設備投資動向の変化によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループが化成品関連において取り扱う商品は、自動車、建材、電気、電子分野などに幅広く素材を提供しており、国内外の経済動向の変化によっては、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 業績の季節変動について

当社グループの産機・建機関連、環境設備関連及びプラント・設備工事関連の業績は、販売先の設備投資予算の執行の関係により、売上が第4四半期に偏重する傾向があり、利益についても第4四半期に偏重する構造となっております。

(5) 自然災害等について

地震、洪水等の自然災害、事故やテロのような、当社グループが予測不可能な事により、インフラや下記の特定商品の依存先に壊滅的被害があった場合や当社グループの設備に被害が発生し、再構築の範囲が大規模となった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループの設備は、日常的及び定期的に保守管理、安全対策を実施しておりますが、不慮の事故による物的、人的被害が生じた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 特定商品の依存について

① ジルコンサンド

ジルコンサンドについては、その大半を世界有数のミネラルサンズの生産会社であるオーストラリアのアイルカ社から仕入れており、同社との間で日本における総販売代理店契約を締結しております。

当社グループは同社との安定的な取引関係を維持しておりますが、ジルコンサンドは鉱産資源であるため、同社において安定した採掘量が確保できなくなった場合、同社との関係に変更があった場合、又は同社の事業方針に変更があった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

② ワーマンポンプ

ワーマンポンプについては、当社と関連会社である大平洋機工株式会社との間で総販売代理店契約を締結しております。当社グループは、同社に対して資本関係のみならず、部品の販売や役員を派遣するなど、強固な関係を構築しておりますが、同社との関係に変更があった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 法的規制について

当社グループの各関連事業は、環境関連法令、貿易関連法令、その他多数の法令の規制を受けているため、今後、これらの規制の改廃や新たな法規制が設けられた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 人材の確保について

当社グループの事業には、専門的な技量や経験を有する人材が不可欠であるため、高度な商品知識をもった人材や高度な技術力をもったエンジニア等の育成には常に注力しております。しかしながら、予定通りの人材の確保を行えなかった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー(以下、「経営成績等」という。)の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりです。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営成績

当連結会計年度におけるわが国経済は、米国と中国の通商問題の長期化の影響もあって輸出や生産の一部に弱さがみられるものの、高い水準の企業収益や雇用環境の改善を背景とする設備投資の増加や個人消費の持ち直しから、緩やかな回復傾向が続いております。ただ、米国と中国の通商問題や英国のEU離脱問題の動向及び海外情勢の不確実性等の影響が見通せない中、今後の経済の先行きについては不透明な状況となっております。

このような経済環境のもとで当社グループは、中期経営計画「Next Stage Rasa 2018～80周年への布石～」の最終年度にあたり、一層の営業活動の積極的な展開と経営効率の向上に努めてまいりました。

当連結会計年度の業績といたしましては、売上高は産機・建機関連で海外向けの建機販売が堅調であったことやプラント・設備工事関連で工事案件の完工が進んだことなどから317億55百万円となり、前年同期と比べ26億78百万円(9.2%)の増収となりました。

営業利益におきましては、売上増収や販売効率の向上から20億29百万円となり、前年同期と比べ1億65百万円(8.9%)の増益となりました。

経常利益におきましては、営業外収支の改善もあり22億64百万円となり、前年同期と比べ2億6百万円(10.0%)の増益となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益におきましては、不動産の売却益などから16億8百万円となり、前年同期と比べ93百万円(6.2%)の増益となりました。

上記の結果、中期経営計画の最終年度(2019年3月期)の経営目標対比では、売上高は計画380億円を62億44百万円下回る317億55百万円となりましたが、各種利益は、営業利益が計画18億円を2億29百万円上回る20億29百万円、経常利益が計画19億円を3億64百万円上回る22億64百万円、親会社株主に帰属する当期純利益が計画12億16百万円を3億92百万円上回る16億8百万円となり、前期(2018年3月期)に続き当期(2019年3月期)も計画を達成いたしました。売上高が中期経営計画を下回った要因としては、資源・金属素材関連において金属シリコンの需要が当初想定ほど伸びず、競合も激しくなり、金属シリコンの売上高が計画を大幅に下回ったことが挙げられます。一方で各種利益については、各セグメントにおいて販売の効率化や経費の抑制に努めた結果、中期経営計画を上回りました。

また、中期経営計画の目標とする経営指標については、自己資本比率は目標の50%以上に対して49.8%と僅かに下回りましたが、自己資本当期純利益率は目標の8%以上に対して10.2%、売上高経常利益率は目標の5%以上に対して7.1%と利益の伸長から目標を上回ることができました。

当連結会計年度におけるセグメント別の状況は、次のとおりです。

資源・金属素材関連では、ジルコンサンドは、上期から下期前半は品薄状態から、下期後半は中国経済の減速懸念により需要が弱含んだことから販売が伸び悩んだものの、ジルコニアを始め輸入原料の需要は年間を通じて堅調で販売が伸びたことから、関連部門の売上高は95億62百万円となり、前年同期と比べ4億19百万円(4.6%)の増収となりました。セグメント利益は販売の効率化を進めたことなどから4億37百万円となり前年同期と比べ9百万円の(2.2%)の増益となりました。

産機・建機関連では、下期後半にかけては民間の設備投資がやや弱含んだものの、各種ポンプ類の販売は概ね安定した推移となったことや海外向けシールド掘進機の販売が好調であったことから、関連部門の売上高は87億58百万円となり、前年同期と比べ8億2百万円(10.1%)の増収となりました。セグメント利益は取扱う商品全般に亘って競争が厳しく7億70百万円となり、前年同期と比べ20百万円(△2.6%)の減益となりました。

環境設備関連では、第1四半期に大口案件があったことや環境商品、水砕設備商品の販売が安定した推移となったことから、関連部門の売上高は15億67百万円となり、前年同期と比べ2億13百万円(15.8%)の増収となりました。セグメント利益は売上増収から2億37百万円となり、前年同期と比べ92百万円(63.5%)の増益となりました。

プラント・設備工事関連では、受注が堅調に推移する中で工事の完工も予定通り進んだことから関連部門の売上高は50億37百万円となり、前年同期と比べ11億83百万円(30.7%)の増収となりました。セグメント利益は売上増収から2億65百万円となり、前年同期と比べ79百万円(43.2%)の増益となりました。

化成品関連では、自動車関連製品の競合が厳しい状況に加え、電線業界向けの合成樹脂販売も受注にやや陰りが見えてきたことから、関連部門の売上高は66億8百万円となり、前年同期と比べ5百万円(△0.1%)の減収となりました。セグメント利益は1億45百万円となり、前年同期と比べ13百万円(△8.5%)の減益となりました。

不動産賃貸関連では、賃貸物件の買換えによる効率化を進めたことから、関連部門の売上高は3億52百万円となり、前年同期と比べ18百万円(5.4%)の増収となりました。セグメント利益は売上増収から1億73百万円となり、前年同期と比べ18百万円(12.2%)の増益となりました。

当期連結会計年度の受注及び販売の実績は、次のとおりであります。

① 受注実績

当連結会計年度の受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(百万円)	前年同期比(%)	受注残高(百万円)	前年同期比(%)
資源・金属素材関連	9,620	8.0	1,350	4.5
産機・建機関連	8,665	△0.7	1,920	△4.6
環境設備関連	1,877	44.7	1,378	29.0
プラント・設備工事関連	6,219	46.5	3,812	44.9
化成品関連	6,578	△2.9	285	△9.5
不動産賃貸関連	—	—	—	—
合計	32,960	10.0	8,748	19.5

- (注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。
2. 不動産賃貸関連は、全て賃貸によるもののため、記載しておりません。

② 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前年同期比(%)
資源・金属素材関連	9,562	4.6
産機・建機関連	8,758	10.1
環境設備関連	1,567	15.8
プラント・設備工事関連	5,037	30.7
化成品関連	6,608	△0.1
不動産賃貸関連	352	5.4
合計	31,885	9.0

- (注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。
2. 販売実績の合計額は、セグメント間の内部取引調整前のものであります。

(2) 財政状態

(流動資産)

流動資産は192億53百万円となり、前年同期に比べ23億57百万円の増加となりました。

これは主に、現金及び預金で9億34百万円の減少等があった一方で、商品及び製品で16億12百万円、完成工事未収入金で10億44百万円の増加等があったことによるものです。

(固定資産)

固定資産は126億1百万円となり、前年同期に比べ10百万円の増加となりました。

これは主に、保険積立金で82百万円の減少等があった一方で、土地で86百万円の増加等があったことによるものです。

(流動負債)

流動負債は116億10百万円となり、前年同期に比べ25億34百万円の増加となりました。

これは主に、短期借入金で13億32百万円、支払手形及び買掛金で9億41百万円の増加等があったことによるものです。

(固定負債)

固定負債は43億73百万円となり、前年同期に比べ3億39百万円の減少となりました。

これは主に、長期借入金で3億44百万円の減少等があったことによるものです。

(純資産)

純資産は158億71百万円となり、前年同期に比べ1億72百万円の増加となりました。

これは主に、自己株式の増加で8億37百万円の減少等があった一方で、利益剰余金で11億64百万円の増加があったことによるものです。

(3) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末の現金及び現金同等物(以下「資金」という。)の残高は33億15百万円となり、前年同期に比べ9億34百万円減少しました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因については、次のとおりです。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動により発生した資金は4億60百万円の減少となりました。(前年同期は21億74百万円の増加)

これは主に、税金等調整前当期純利益23億56百万円、仕入債務の増加9億42百万円等により資金が増加した一方で、たな卸資産の増加17億63百万円、売上債権の増加13億21百万円、法人税等の支払額5億98百万円等により資金が減少したことによるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動により発生した資金は1億47百万円の減少となりました。(前年同期は5億24百万円の減少)

これは主に、有形固定資産の売却4億1百万円等により資金が増加した一方で、有形固定資産の取得5億6百万円等により資金が減少したことによるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動により発生した資金は3億26百万円の減少となりました。(前年同期は1億68百万円の減少)

これは主に、短期借入金の純増13億32百万円、長期借入れ8億70百万円等により資金が増加した一方で、長期借入金の返済12億43百万円、自己株式の取得8億65百万円、配当金の支払4億43百万円等により資金が減少したことによるものです。

資本の財源及び資金の流動性につきましては、次のとおりです。

当社グループの資金需要の主なものは、商品の仕入や設備投資であります。これらの資金需要については、営業活動によるキャッシュ・フローの収入及び金融機関の借入にて対応することとしており、資金の流動性を安定的に確保しております。

4 【経営上の重要な契約等】

契約会社名	契約品目	契約内容	契約期間	相手方の名称 (相手方の所在地)
ラサ商事株式会社	ジルコンサンド	日本国内での総販売代理店契約	2018年1月より2年間 (自動更新)	アイルカ社 (オーストラリア)
	ワーマンポンプ	日本国内及びアジア諸国における総販売代理店契約(ウイヤーミネラルズオーストラリア社(オーストラリア)と大平洋機工株式会社との技術提携契約改定による)	2014年7月より 2019年6月まで(注)	大平洋機工株式会社 (日本)
	ヒドロスタルポンプ並びに プリローテーションシステム	日本国内での総販売代理店契約(ヒドロスタル社、フリデコ社(スイス)と大平洋機工株式会社との技術提携契約改定による)	2019年1月より 2020年12月まで	大平洋機工株式会社 (日本)

(注) ワーマンポンプに係る大平洋機工株式会社との総販売代理店契約については、現在契約内容について交渉中です。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

子会社ラサ・リアルエステート株式会社は、2018年7月18日付で、東京都世田谷区の土地(363.59㎡)及び建物(148.75㎡)を460百万円で購入いたしました。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

(2019年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
本社 (東京都中央区)	全社(共通)	本社機能	2	—	— (—)	23	26	116
東京機械センター (千葉県習志野市)	産機・建機	倉庫 修理工場	39	0	117 (2,267)	0	157	3
千葉機械センター (千葉県八街市)	産機・建機	倉庫	68	10	346 (8,194)	8	433	—

(注) 1. 帳簿価額のうち、「その他」は工具、器具及び備品、貸与資産等であります。

2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

(2) 国内子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
旭テック 株式会社	本社・第一工場 (千葉県袖ケ浦市)	プラント・ 設備工事	本社機能 生産設備	713	44	427 (19,600)	10	1,196	61
	第二工場 (千葉県袖ケ浦市)	プラント・ 設備工事	生産設備	134	0	427 (19,625)	3	565	5
ラサ・リアル エステート 株式会社	RASA日本橋 ビルディング (東京都中央区)	不動産賃貸	賃貸ビル	709	3	1,469 (602)	1	2,183	2
	イズミビルディング (東京都中央区)	不動産賃貸	賃貸ビル	277	—	1,804 (311)	0	2,082	—
	上野毛物件 (東京都世田谷区)	不動産賃貸	賃貸用 土地	—	—	486 (459)	—	486	—
	南鳩ヶ谷物件 (埼玉県川口市)	不動産賃貸	賃貸用 土地	—	—	311 (1,058)	—	311	—
	奥沢物件 (東京都世田谷区)	不動産賃貸	賃貸用 土地・建物	36	—	423 (363)	—	459	—

(注) 1. 帳簿価額のうち、「その他」は工具、器具及び備品等であります。

2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

(3) 在外子会社

該当事項はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 設備の新設

記載事項はありません。

(2) 設備の除去等の計画

記載事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	49,600,000
計	49,600,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月26日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	12,910,000	12,910,000	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数は100株であります。
計	12,910,000	12,910,000	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2017年12月5日 (注)1	300	12,700	131	1,985	131	1,743
2018年1月5日 (注)2	210	12,910	91	2,076	91	1,835

(注) 1. 有償一般募集

発行価格 922円

発行価額 874.2円

資本組入額 437.1円

2. 有償第三者割当(オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資)

発行価格 922円

資本組入額 437.1円

割当先 三菱UFJモルガン・スタンレー証券㈱

(5) 【所有者別状況】

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況(1単元の株式数 100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	22	24	152	56	27	20,130	20,411	—
所有株式数(単元)	—	31,113	2,048	19,979	18,012	28	57,858	129,038	6,200
所有株式数の割合(%)	—	24.1	1.6	15.5	14.0	0.0	44.8	100.0	—

- (注) 1. 自己株式990,161株は「個人その他」に9,901単元、「単元未満株式の状況」に61株含まれております。
2. 上記「金融機関」には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式が2,340単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	640	5.4
MSIP CLIENT SECURITIES (常任代理人 モルガン・スタンレーMUFG証券株式会社)	25 Cabot Square, Canary Wharf, London E14 4QA, U.K. (東京都千代田区大手町1丁目9番7号)	569	4.8
日本生命保険相互会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内1丁目6番6号 (東京都港区浜松町2丁目11番3号)	496	4.2
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	459	3.9
アトラス コプコ シツクラ ホールディング エービー (常任代理人 大和証券株式会社)	C/O Atlas Copco AB 105 23 Stockholm, Sweden (東京都千代田区丸の内1丁目9番1号)	400	3.4
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目2番1号	360	3.0
クミネ工業株式会社	東京都千代田区岩本町1丁目10番5号	290	2.4
BBH FOR FIDELITY PURITAN TR:FIDELITY SR INTRINSIC OPPORTUNITIES FUND (常任代理人 株式会社三菱UFJ銀行)	245 Summer Street Boston, MA 02210 U.S.A. (東京都千代田区丸の内2丁目7番1号)	235	2.0
大太平洋機工株式会社	千葉県習志野市東習志野7丁目5番2号	207	1.7
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	201	1.7
計	—	3,858	32.4

- (注) 1. 大太平洋機工株式会社(2019年3月31日現在当社が45.51%株式を保有)が保有している上記株式については、会社法第308条第1項及び会社法施行規則第67条の規定により議決権を有しておりません。
2. 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)の所有する株式のうち、234千株は当社が導入した役員向け株式交付信託が所有する株式であります。なお、当該株式は連結財務諸表及び財務諸表において自己株式としております。
3. 上記のほか当社所有の自己株式990千株があります。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(2019年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(相互保有株式) 普通株式 207,000	—	—
	(自己保有株式) 普通株式 990,100	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 11,706,700	117,067	—
単元未満株式	普通株式 6,200	—	1 単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	12,910,000	—	—
総株主の議決権	—	117,067	—

(注) 1. 「完全議決権株式(その他)」の欄の普通株式には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式234,000株(議決権2,340個)が含まれております。

2. 単元未満株式数には、当社所有の自己株式 61株が含まれております。

② 【自己株式等】

(2019年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(相互保有株式) 大平洋機工株式会社	千葉県習志野市東習志野 7丁目5番2号	207,000	—	207,000	1.6
(自己保有株式) 当社	東京都中央区日本橋蛸殻町 1丁目11番5号	990,100	—	990,100	7.7
計	—	1,197,100	—	1,197,100	9.3

(注) 上記の自己名義所有株式数には、役員向け株式交付信託保有の当社株式数(234,000株)を含めておりません。

(8) 【役員・従業員株式所有制度の内容】

当社は、2016年6月28日開催の第114期定時株主総会及び2017年6月28日開催の第115期定時株主総会決議に基づき、当社取締役(監査等委員である取締役及び社外取締役を除く。以下同じ。)を対象に、当社の業績及び株式価値と取締役の報酬との連動性をより明確にし、取締役が株主の皆様と株価上昇によるメリット及び株価下落リスクを共有することで、中長期的な業績の向上と企業価値の増大に貢献する意識を高めることを目的として、業績連動型株式報酬制度(以下「本制度」という。)を導入しております。なお本制度は2019年7月に当初の信託期間の期限が到来するため、期限を2022年7月末まで3年延長することを2019年6月26日の取締役会にて決議しております。

① 業績連動型株式報酬制度の概要

本制度は、当社が金銭を拠出することにより設定する信託(以下「本信託」という。)が当社株式を取得し、当社取締役会が定める「株式交付規程」に従って、その役位及び業績達成度(中期経営計画の連結当期純利益目標達成率)に応じて付与されるポイントの数に相当する数の当社株式が、本信託を通じて各取締役に對して交付されるという業績連動型の株式報酬制度であります。なお、当社取締役が当社株式の交付を受ける時期は、原則として取締役の退任時となります。

② 支給対象役員

当社取締役

③ 取締役に取得させる予定の株式の総数

564,000株

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2018年11月27日)での決議状況 (取得期間2018年11月28日～2018年11月28日)	1,000,000	921,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	940,000	865,740,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	60,000	55,260,000
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	6.0	6.0
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	6.0	6.0

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	2	2,006
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)	株式数(株)	処分価額の総額 (百万円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	990,161	—	990,161	—

(注) 1. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

2. 上記の保有自己株式数には、役員向け株式交付信託保有の当社株式数(234,083株)を含めておりません。

3 【配当政策】

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当社は株主の皆様への長期的利益還元を重要な経営課題の一つと考え、安定配当を基本方針としつつ、企業体質の強化、今後の事業展開及び内部留保の充実等を勘案した上で、配当性向を25%前後とさせていただいており、当期の配当は、中間で16.50円、期末で17.50円、年間で34円(前期比1円増配)といたしました。

次期の配当については、5月13日に公表しました「新中期経営計画策定のお知らせ」及び「配当方針変更のお知らせ」のとおり目標とする配当性向を30%前後へ引き上げる方針としております。

内部留保資金につきましては、中長期的な視点に立って、有為な人材の採用・育成を目指すとともに、新規市場の開拓や新規商品の開発などに充当し、事業の積極的展開・体質改善を図り、競争力の強化と企業価値の増大を図る所存であります。

なお、当社は中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額	1株当たり配当額
2018年10月30日 取締役会決議	212百万円	16.50円
2019年6月26日 定時株主総会決議	208百万円	17.50円

(注) 1. 2018年10月30日取締役会決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する自社の株式に対する配当金4百万円が含まれております。

2. 2019年6月26日定時株主総会決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する自社の株式に対する配当金4百万円が含まれております。

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

①コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、コーポレート・ガバナンスの強化を重要な経営テーマと認識し、積極的に取り組んでおります。その基本的な考え方は、取締役会及び監査等委員会を中心として、コーポレート・ガバナンスの充実を図り、株主・取引先等ステークホルダーへの説明責任を果たし、健全で透明性が高く、経営環境の変化に迅速かつ的確に対応できる経営体制を構築、維持することです。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

i) 企業統治の体制の概要

当社の機関の内容及び監査・監督の内容は以下のとおりです。

a 取締役会

監査等委員でない取締役4名(井村周一(議長)、伊藤信利、窪田義広、青井邦夫)及び監査等委員である取締役3名(朝倉正、柿原康一郎、森脇幸治)で構成され、そのうち2名(柿原康一郎、森脇幸治)が社外取締役であります。取締役会は、当社の業務執行に関する重要事項を決定し、取締役の職務の執行を監督する機関として、原則毎月1回以上開催しております。

b 監査等委員会

監査等委員である取締役3名(朝倉正(委員長)、柿原康一郎、森脇幸治)で構成されております。監査等委員である取締役は取締役会に出席するとともに、常勤監査等委員は経営会議等の重要な会議に出席し、取締役の職務執行に対する適正な監査を行うとともに十分な情報に基づいて経営全般に関して幅広く監査を行っております。

c 指名・報酬委員会

社内取締役1名(井村周一(委員長))と社外取締役2名(柿原康一郎、森脇幸治)で構成されております。取締役会からの諮問に応じて取締役の選解任等に関する事項及び取締役の報酬等に関する事項について審議し、取締役会に答申を行っております。

d 内部監査室

社長直轄の組織である内部監査室があり、各年度毎に内部監査計画を策定し「内部監査規程」に基づき、日常の業務の適正性、合理性、効率性を監査するため、原則年1回、グループ会社を含めた全部門を対象に監査を実施しております。

また、内部監査室は、監査等委員会及び会計監査人と連携を取り、内部監査の実効性、効率性を高めております。

これらの機関のほか、経営における意思決定・監督機能と執行機能を分離し、迅速かつ効率的な経営を推進するため、執行役員制度を採用しております。

また、取締役会における審議内容の充実を図るため、経営上の重要案件について審議する機関として、社外取締役を除く取締役を中心としたメンバーで構成される経営会議及び各種委員会を設けており、これらの機関で十分な審議が尽くされた案件を、取締役会に付議することとしております。

- c 当社グループの損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 当社グループの事業活動推進にあたって、当社は、想定されるリスクの評価、対応方針、具体的対策等を「リスクマネジメント委員会」及び「経営会議」にて、事前に検討した上で実施いたします。ただし、「取締役会規則」に定められた決議事項については、取締役会の決議を経て実施いたします。
- d 当社グループの取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- ・当社は、原則、月1回の定時取締役会の開催の他、必要に応じて臨時取締役会を開催し、当社グループの経営に関する重要事項についての意思決定を行ってまいります。また、取締役会に付議する重要事項については、必要に応じて、事前に「経営会議」にて審議し、そこでの議論を基に、取締役会に付議する体制といたします。
 - ・当社グループの取締役は、職務執行状況については、各社の取締役会において適宜報告いたします。
 - ・当社は、経営における意思決定・監督機能と執行機能を分離し、迅速かつ効率的な経営を推進するため、執行役員制度を採用いたします。
 - ・当社グループは、「取締役会規則」、「組織規程」、「職務権限規程」等の社内規程により、役職員の役割と権限を明確にすることで、適正かつ効率的な職務の執行を図ってまいります。
 - ・当社グループは、財務報告及び経営資料作成のためのIT化を推進するとともに、情報共有化ツールとしての社内ポータルサイト等の一層の充実を図ってまいります。
- e 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・当社グループは、事業活動の適正を確保するため、「関係会社管理規程」に基づき、当社が子会社に対し助言・指導を行う管理体制を構築するとともに、子会社が経営上の重要事項を実施する場合は、当社取締役会にも付議することといたします。
 - ・海外子会社等の事業拠点については、現地の法令を遵守し、慣習を尊重いたします。
 - ・「内部監査規程」に基づき、当社の内部監査室が当社グループの内部監査を実施し、業務遂行の適法性・妥当性等を監査いたします。
 - ・当社グループは、原則月1回、当社グループの取締役等が出席する「グループ連絡会」を開催し、子会社の取締役が子会社に関する重要事項について報告することといたします。
- f 監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項並びに当該取締役及び使用人の取締役(監査等委員である取締役を除く。)からの独立性及び当該取締役及び使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- ・当社は、監査等委員会の職務を補助すべき使用人を置くものといたします。
 - ・当社の監査等委員会の職務を補助すべき使用人は、取締役(監査等委員である取締役を除く。)から独立して専ら監査等委員会の指示に従い職務を遂行するものとし、その評価、異動には監査等委員会の同意を要するものといたします。
- g 取締役及び使用人が監査等委員会に報告するための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制
- ・当社の取締役並びに子会社の取締役及び監査役は、重要情報を共有することを基本方針といたします。
 - ・当社は、常勤監査等委員が「経営会議」等重要会議に出席し、決議事項及び報告事項並びに審議過程を把握できる体制といたします。
 - ・当社グループの取締役(監査等委員である取締役を除く。)は、当社グループに著しい損害を及ぼすおそれがある事実を発見した場合には、直ちに監査等委員会、常勤監査等委員又は監査役に報告するものといたします。
 - ・当社グループの取締役及び使用人等が、監査等委員会から業務執行に関する事項及びその他重要な事項について報告を求められたときは、迅速かつ適正に対応いたします。
 - ・当社内部監査室は、当社グループの内部監査計画及び監査結果等を監査等委員会に報告いたします。
 - ・当社総務人事企画部は、コンプライアンス・ヘルプライン(通報・相談窓口)に寄せられた当社グループの内部通報の状況等を監査等委員会に報告するものといたします。また、当社は、当該報告をしたことを理由として報告者に対して報復行為や人事処遇上の不利益な取り扱いを行うことを禁止いたします。
- h その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- ・当社は、代表取締役社長が監査等委員と定期的な会合を持つことにより、監査等委員会監査の環境整備の状況、監査上の重要課題について意見交換を行い、相互の意思疎通を図ってまいります。
 - ・当社は、会計監査人の往査及び監査総評には、常勤監査等委員が立ち会うものといたします。
 - ・監査等委員会は、当社内部監査室との連携を密にし、監査業務の実効性と効率性を図ってまいります。
 - ・当社グループの監査等委員及び監査役は、定期的に「グループ監査連絡会」を開催し、意見・情報交換を行うものといたします。
 - ・当社は、監査等委員から職務の執行について生ずる費用の前払い等の請求があった場合は、担当部門において精査の上、当該費用又は債務の処理をするものといたします。

i 財務報告の信頼性を確保するための体制

- ・当社取締役は、信頼に足る財務報告を作成することが社会的信用の維持・向上のために極めて重要であることを認識するとともに、財務報告の信頼性を確保するために、当社グループの役職員に対してあらゆる機会を捉えて、正しく業務を遂行すべきことが、業務の有効性及び効率性を向上させる手段であることを周知徹底させるなど、内部統制の強化を図ってまいります。
- ・当社取締役は、当社グループの資産の取得、譲渡、有効利用が正当な手続きと承認のもとで適切に行われるように、資産の保全に最善の努力をいたします。
- ・当社グループは、財務報告の作成過程において誤謬等が生じないよう、ITの活用を推進し、実効性のある内部統制システムを構築いたします。

j 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備状況

- ・当社は、内部統制システムに関する基本的な考え方に基づき、健全な会社経営のため、反社会的勢力とは決して関わりを持たず、また不当な要求に対しては断固としてこれを拒否することを宣言しております。
- ・反社会的勢力が介入してきたときの窓口は、コンプライアンス統括部門の総務人事企画部、対応責任者は、総務人事企画部長とし、総務人事企画部との円滑な連携・協力体制のもと、組織が一致して冷静な対応を行うこととしております。また、「コンプライアンス・マニュアル」及び「反社会的勢力対応マニュアル」を制定し、社員への対応の徹底を図っております。さらに、「中央地区特殊暴力防止対策協議会」に加盟し、研修に参加する等情報収集に努めるとともに、外部情報機関との連携も取ることができる体制としております。

④ 責任限定契約の内容の概要

社外取締役とは会社法第427条第1項に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任額は、同法第425条第1項に規定する最低責任限度額としております。

⑤ 取締役の定数

当社は、取締役(監査等委員である取締役を除く。)を10名以内とし、監査等委員である取締役については7名以内とする旨を定款で定めております。

⑥ 取締役の選任の決議要件

i) 取締役の選任決議

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。

ii) 取締役の選任

当社は、取締役の選任について、累積投票によらないものとする旨を定款で定めております。

⑦ 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

i) 自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項により、将来の機動的、かつ、迅速な資本政策の遂行に備えるため、取締役会の決議によって自己株式の取得をすることができる旨を定款に定めております。

ii) 中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により取締役会の決議によって中間配当ができる旨を定款に定めております。

⑧ 株主総会の特別決議事項

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行うことができる旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

①役員一覧

男性7名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
代表取締役 社長	井村周一	1951年2月4日生	1975年1月 当社入社 1999年4月 産業機械一部長 2000年4月 大阪支店長 2001年6月 取締役大阪支店長 2004年4月 取締役大阪支店長兼同店営業部長 2005年4月 常務取締役管理本部長 2005年6月 代表取締役社長 2015年2月 ラサ・リアルエステート株式会社代表取締役(現) 2017年9月 当社代表取締役社長兼物資営業本部長 2018年4月 代表取締役社長(現)	(注)3	117,600
専務取締役 機械営業 本部長	伊藤信利	1950年3月26日生	1975年4月 当社入社 1999年4月 福岡支店営業部長 2004年4月 福岡支店長兼同店営業部長 2005年7月 執行役員福岡支店長兼同店営業部長 2006年4月 執行役員機械業務本部長 2007年4月 執行役員業務本部長兼北海道支店長 2007年6月 取締役兼執行役員業務本部長兼北海道支店長 2008年4月 取締役兼執行役員業務本部長 2009年6月 常務取締役兼執行役員業務本部長 2010年4月 常務取締役業務本部長 2011年4月 常務取締役業務・開発本部長 2011年6月 専務取締役業務・開発本部長 2012年1月 専務取締役機械営業本部長兼業務・開発本部長 2012年4月 専務取締役機械営業本部長(現)	(注)3	34,500
常務取締役 管理 本部長	窪田義広	1961年4月2日生	1990年6月 当社入社 2009年4月 名古屋支店長兼同店営業部長 2012年4月 執行役員機械営業本部副本部長兼業務・開発部長 2014年12月 旭テック株式会社常務取締役 2017年4月 当社執行役員環境営業本部長 旭テック株式会社取締役(非常勤) 2017年5月 旭テック株式会社取締役(非常勤)退任 2017年6月 当社取締役環境営業本部長 2018年4月 取締役機械営業本部副本部長 2018年8月 取締役管理本部長兼経営企画室長 2019年4月 取締役管理本部長 2019年5月 旭テック株式会社取締役(非常勤)(現) 2019年6月 当社常務取締役管理本部長(現)	(注)3	5,500
取締役 物資営業 本部長	青井邦夫	1970年7月28日生	2008年3月 当社入社 2014年12月 業務部長 2018年4月 執行役員業務部長 2019年4月 執行役員物資営業本部長 2019年6月 取締役物資営業本部長(現)	(注)3	1,700
取締役 (監査等委員)	朝倉正	1962年8月1日生	1992年8月 当社入社 2009年4月 産業機械一部長 2010年4月 業務・開発部長 2012年4月 大阪支店長 2015年4月 機械営業本部副本部長兼大阪支店長 2017年5月 機械営業本部長補佐 2018年4月 札幌支店長 2019年4月 管理本部付部長 2019年6月 取締役(監査等委員)(現)	(注)4	3,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	柿原 康一郎	1951年10月21日生	1974年4月 株式会社三井銀行(現株式会社三井住友銀行)入行 1999年1月 株式会社さくら銀行(現株式会社三井住友銀行)日本橋営業部日本橋第三営業部長 2001年4月 株式会社三井住友銀行本店営業第九部長 2002年6月 同営業審査第一部部付部長 2003年12月 同本店付(旧)三井鉱山株式会社出向 顧問 2004年1月 株式会社三井住友銀行退職 (旧)三井鉱山株式会社常務取締役常務執行役員 2004年3月 三井鉱山株式会社(現日本コークス工業株式会社) 常務取締役 常務執行役員 2005年6月 同専務取締役 専務執行役員 2008年4月 同取締役副社長 副社長執行役員 2010年6月 日本コークス工業株式会社取締役副社長 2013年6月 同退任 室町殖産株式会社監査役 2014年6月 同退任 当社監査役 2017年6月 取締役(監査等委員)(現)	(注) 4	—
取締役 (監査等委員)	森脇 幸治	1945年6月5日生	1969年4月 ラサ工業株式会社入社 1995年6月 同化成品事業部営業部長 2003年6月 同取締役化成品事業部長兼営業部長 2006年6月 同代表取締役常務取締役経営企画室長、 経理部・精密機械営業部担当 2007年6月 同代表取締役常務取締役経営企画室長、 精密機械営業部担当 2008年6月 同代表取締役専務取締役経営企画室長、 精密機械営業部担当 2010年1月 同代表取締役専務取締役経営企画室長、 精密機械営業部・NCR I 営業部担当 2010年6月 同代表取締役専務取締役経営企画室長、 化成品事業部・精密機械営業部・NCR I 営業部担当 2011年6月 同退任 2012年1月 ダイシンケミカル株式会社取締役相談役 (現) 2015年6月 当社取締役 2017年6月 取締役(監査等委員)(現)	(注) 4	—
計					162,300

- (注) 1. 取締役柿原康一郎及び森脇幸治は社外取締役であり、責任限定契約を締結しております。
2. 当社の監査等委員会については次のとおりであります。
 委員長 朝倉正、委員 柿原康一郎、委員 森脇幸治
 なお、朝倉正は常勤監査等委員であります。
3. 取締役(監査等委員を除く)の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から1年間であります。
4. 取締役(監査等委員)の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2年間であります。
5. 当社は、執行役員制度を導入しております。提出日現在における執行役員は次のとおりであります。
- | | | |
|------|----------|-------|
| 執行役員 | 産業機械三部長 | 近藤 文人 |
| 執行役員 | 産業機械二部長 | 川内 裕之 |
| 執行役員 | 福岡支店長 | 早川 一郎 |
| 執行役員 | 大阪支店長 | 長谷川幸雄 |
| 執行役員 | 機械技術部長 | 倉持 正見 |
| 執行役員 | 総務人事企画部長 | 相武 英明 |

② 社外役員の状況

当社の社外取締役は2名であります。

社外取締役の柿原康一郎氏は、金融機関での勤務経験により、財務・会計に関する深い造詣を有しているとともに、2013年6月まで日本コークス工業株式会社の取締役副社長を務め、経営者として手腕を発揮してまいりました。これらのことから、当社がグローバルな事業展開及び持続的な企業価値向上を目指すにあたり、コーポレート・ガバナンス機能の強化に貢献する人材であると判断したため、監査等委員である社外取締役に選任しております。なお、同氏と当社の間で人間関係、取引関係、資金的関係等の特別な利害関係はありません。

社外取締役の森脇幸治氏は、2011年6月までラサ工業株式会社の代表取締役専務取締役を務めており、在任中は化成品事業や経営企画部門などを担当するとともに、経営者としての豊富な経験と実績を有しております。これらのことから、当社がグローバルな事業展開及び持続的な企業価値向上を目指すにあたり、コーポレート・ガバナンス機能の強化に貢献する人材であると判断したため、監査等委員である社外取締役に選任しております。なお、同氏と当社の間で人間関係、取引関係、資金的関係等の特別な利害関係はありません。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との連携

内部監査は、内部監査室が行っており、日常の業務の適正性、合理性、効率性について、グループ会社を含め全部門を対象に監査を実施しており、監査委員会の常勤監査等委員に対し監査結果の報告を行っております。また、監査等委員会においては、常勤監査等委員である取締役が経営会議等の重要な会議に出席することや監査等委員会監査で得られた情報は社外取締役である監査等委員と共有されるとともに、会計監査人も会計監査の適正性の判断のために情報交換を行う等連携を行っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員は3名であり、そのうち2名が社外取締役です。監査等委員は取締役会に出席するとともに、常勤監査等委員においては経営会議等の重要な会議に出席し、取締役の職務執行に対する適正な監査を行うとともに、十分な情報に基づいて経営全般に関して幅広く監査を行っております。

監査等委員会は、監査等委員監査の質と効率性の向上のため、及び会計監査人の監査の相当性の判断のためにも、会計監査人との連携は不可欠との認識を持っております。また、内部監査室から内部監査計画書を受領し、意見・情報交換を行うことにより、合理的・効果的な監査に努めております。

② 内部監査の状況

内部監査は、内部監査室(2名)が各年度毎に内部監査計画を策定し、「内部監査規程」に基づき、日常の業務の適正性、合理性、効率性を監査するため、グループ会社を含めた全部門を対象に監査を実施しております。また、内部監査室は、監査等委員及び会計監査人と連携を取り、内部監査の実効性、効率性を高めております。

③ 監査法人の状況

a. 監査法人の名称

監査法人大手門会計事務所

b. 業務を執行した公認会計士

当社の会計監査業務を執行した公認会計士は、業務執行社員である中村尋人、亀ヶ谷 顕であり、2名は監査法人大手門会計事務所に所属しております。

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士7名、会計士試験合格者1名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

監査法人の選定にあたっては、監査法人の監査体制、独立性、専門性及び品質管理体制の整備等の適切性を考慮したうえで選定しております。また、監査等委員会は監査法人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当し、当社の会計監査業務に重大な支障があると判断したときには、監査等委員会全員の同意に基づき、監査法人を解任いたします。また、監査法人の職務の執行に支障がある場合など、監査法人の変更が必要であると判断した場合には、当社監査等委員会は監査法人の解任または不信任に関する議案の内容を決定し、当社取締役会は、当該決定に基づき当該議案を株主総会に提出いたします。

e. 監査等委員会による監査法人の評価

当社監査等委員会は、監査法人が独立性、専門性を保持し、かつ監査に関する品質管理の基準に従った適正な職務の遂行が行える監査体制が確保されていることについて確認及び検証するとともに、監査法人から職務の遂行状況について報告を受け、職務執行に問題ないと評価しております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」(平成31年1月31日内閣府令第3号)による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56)d(f)iからiiiの規定に経過措置を適用している。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	22	—	22	—
連結子会社	—	—	—	—
計	22	—	22	—

b. その他重要な報酬の内容)

該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

該当事項はありませんが、監査日数等を勘案したうえで決定しております

d. 監査等委員会が監査法人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は監査法人の報酬等につき、監査法人の職務遂行状況、報酬見積りの算出根拠及び監査計画の内容から検討を行ったうえで適切であると判断し、会社法第399条第1項及び第3項に基づく同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の監査等委員でない取締役の報酬等は、固定報酬である基本報酬と短期業績連動報酬から成る「金銭報酬」、並びに中長期的な株主価値に連動する「業績連動型株式報酬」で構成しております。「金銭報酬」は、2017年6月28日開催の第115期定時株主総会において決議された報酬の限度額(年額4億円)の範囲内で、概ね基本報酬は8割、短期業績連動報酬は2割としております。

基本報酬は会社の業績や社会情勢、職位及び職務の内容、並びに過去の支給実績、他社の役員の報酬水準等を勘案し、短期業績連動報酬は単年度の業績に連動させるために連結当期純利益を基に算出した枠に、業績向上に対する貢献枠(定性評価を含む)を加えて算出し、原案を取締役社長が社外取締役が過半数を占める監査等委員会と協議し、必要に応じて客観的な意見を反映させううえで、取締役会で審議のうえ、代表取締役井村周一に一任してあります。

当社では、2019年3月15日付けで過半数を社外取締役で構成する指名・報酬委員会を発足させ、委員会において前期に支給された役員報酬について確認するとともに、今後は監査等委員でない取締役の報酬等の原案について審議を行い、取締役会に答申し審議のうえ、代表取締役井村周一に一任する方針としております。

また、「金銭報酬」とは別枠で中長期的な業績や企業価値増大を目的とするため中期経営計画の連結当期純利益を指標とする「業績連動型株式報酬」(信託方式)を導入しております。当該報酬に係る株式の取得資金とする当初3年間の拠出限度額は、2016年6月28日開催の第114期定時株主総会及び2017年6月28日開催の第115期定時株主総会において決議された1億70百万円となっております。

当事業年度における「短期業績連動報酬」及び「業績連動型株式報酬」に係る指標の目標は連結当期純利益8億96百万円で、実績は15億14百万円です。

当社の監査等委員である取締役の報酬については、「金銭報酬」の固定報酬の基本報酬のみで構成され、2017年6月28日開催の第115期定時株主総会において決議された報酬の限度額(年額1億円)の範囲内で、独立性・中立性の観点から監査等委員である取締役の協議により決定してあります。

「業績連動型株式報酬」の具体的な算定方法については以下の通りです。

<業績連動型株式報酬制度及び交付株式数の算定方法>

当社は、2016年6月28日開催の第114期定時株主総会及び2017年6月28日開催の第115期定時株主総会決議に基づき当社取締役(監査等委員である取締役及び社外取締役を除く。以下同じ。)を対象とする業績連動型株式報酬制度(以下「本制度」という。)を導入しております。本制度は2019年7月末に当初の信託期間の期限が到来するため、期限を3年延長し2022年7月末とすることを2019年6月26日の取締役会にて決議してあります。

a 本制度の概要

本制度は、当社が金銭を拠出することにより設定する信託(以下「本信託」という。)が当社株式を取得し、当社が取締役会で定める「株式交付規程」に従って、その役位及び業績達成度(中期経営計画の連結当期純利益目標達成率)に応じて付与するポイントの数に相当する数の当社株式が本信託を通じて各取締役に對して交付されるという、業績連動型の株式報酬制度です。当社取締役が当社株式の交付を受ける時期は、原則として取締役の退任時です。

b 取締役に交付される当社株式数の上限と算定方法

・取締役に対するポイント付与方法及びその上限

当社は、取締役会が定める「株式交付規程」に基づき、各取締役に對し、信託期間中の毎年所定の時期に、直前に終了する事業年度における役位及び業績達成に応じてポイントを付与します。当社が取締役に付与するポイントの総数の上限は、1事業年度当たり94,000ポイント(対応する株式数にして94,000株相当)としております。具体的なポイント付与の算定方法は以下の通りです

付与するポイント(付与ポイント)は次式によります。

$$\text{「付与ポイント*1」} = \text{「役位別基礎ポイント*2」} \times \text{「付与率*3」} \times \text{「在任期間係数*4」}$$

*1 付与ポイントは1ポイント未満は切り捨てる

*2 「役位別基礎ポイント」は取締役の役位に応じて以下の表のとおり

役位	役位別基礎ポイント
社長	10,000
副社長	9,000
専務	8,000
常務	7,000
(上記役位のない)常勤取締役	5,000
非常勤取締役	4,000

*3 「付与率」は「業績目標達成率」に応じて以下の表のとおり

業績目標達成率	付与率
150%以上	1.5
120%以上150%未満	1.2
110%以上120%未満	1.1
100%以上110%未満	1.0
90%以上100%未満	0.9
80%以上90%未満	0.7
70%以上80%未満	0.5
70%未満	0.0

「業績目標達成率」は評価対象期間ごとに以下の表で定める中期経営計画目標に対する達成率とする。

中期経営計画目標 (当期純利益(連結))	2019年度	2020年度	2021年度
	14億60百万円	16億10百万円	17億30百万円

*4 「在任期間係数」は取締役毎に次式により算出します。

「在任期間係数」=取締役の評価対象期間※における在任月数(但し1ヵ月未満を切り捨てとする)÷12

※「取締役の評価対象期間」とは、毎年のポイント付与日の直前に終了した事業年度(毎年4月1日から翌年3月末日)の期間とする。

・付与されたポイントの数に応じて交付される当社株式数

各取締役に交付される当社株式の数は、当該取締役に付与されたポイント数に1.0を乗じた数とする。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬 (固定報酬)	短期業績 連動報酬	業績連動型 株式報酬	退職慰労金	
取締役 (監査等委員及び社外 取締役を除く)	156	89	25	40	—	8
監査等委員 (社外取締役を除く)	15	15	—	—	—	1
監査役 (社外監査役を除く)	—	—	—	—	—	—
社外役員	8	8	—	—	—	2

(注) 1. 当社は、2017年6月28日付で監査役会設置会社から監査等委員会設置会社に移行しております。
2. 上記の取締役の支給人員には、2018年6月27日開催の第116期定時株主総会の終結の時をもって退任した取締役2名と2018年10月31日付で退任した取締役1名を含んでおります。

③ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額

連結報酬等の総額が1億円以上であるものが存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、投資株式の区分について、株式の価値の変動又は配当によって利益を受けることを目的として保有する株式を純投資目的の投資株式とし、円滑な取引・協力関係の維持・強化や安定的な資金調達を目的として保有する株式を純投資目的以外の目的である投資株式としております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 純投資目的以外の目的である上場株投資株式については、個別株式ごとに中長期視点に立った円滑な取引・協力関係の維持・強化の観点に資本コストも加味した総合的な観点から保有効果を取締役会で検証しております。

2019年3月末時点の純投資目的以外の目的である上場投資株式については、上記の検証を取締役会で行い、一部の株式については保有効果が希薄化したことなどから売却していくこととし、3銘柄について5月と6月に売却を行っております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	4	185
非上場株式以外の株式	23	832

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	2	1	持株会を通じた定期的な買入のため。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

該当事項はありません。

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果(注1) 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
クニミネ工業株式会社	325,000	325,000	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため	有
	262	361		
八洲電機株式会社	100,000	100,000	同上	有
	83	85		
三機工業株式会社	61,000	61,000	同上	有
	74	71		
宝印刷株式会社	42,100	42,100	同上	有
	69	78		
ラサ工業株式会社	35,573	34,869	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため 持株会を通じた定期的な買入のため	無
	61	76		
三井住友トラスト・ホールディングス株式会社	12,000	12,000	安定的な資金調達に資するため	無(注2)
	49	52		
株式会社クボタ	24,000	24,000	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため	無
	37	44		
サンワテクノス株式会社	39,480	39,480	同上	有
	36	79		
株式会社三井住友フィナンシャルグループ	6,000	6,000	安定的な資金調達に資するため	無(注3)
	23	27		
株式会社みずほフィナンシャルグループ	120,000	120,000	同上	無
	20	23		
名港海運株式会社	15,000	15,000	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため	有
	16	18		
石原産業株式会社	14,100	14,100	同上	無
	16	19		
セントラル硝子株式会社	5,600	5,600	同上	無
	14	13		
神鋼商事株式会社	4,800	4,800	同上	無
	12	17		
三菱製鋼株式会社	7,100	7,100	同上	無
	11	17		
堺化学工業株式会社	4,172	4,169	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため 持株会を通じた配当再投資による買入のため	無
	10	12		
大平洋金属株式会社	3,000	3,000	安定的な取引・協力関係の維持・強化に資するため	有
	8	9		
株式会社IHI	2,400	2,400	同上	無
	6	8		
川崎重工業株式会社	1,700	1,700	同上	無
	4	5		
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	8,000	8,000	安定的な資金調達に資するため	無(注4)
	4	5		
株式会社りそなホールディングス	6,000	6,000	同上	無
	2	3		
株式会社東京きらぼしフィナンシャルグループ	1,480	1,480	同上	無
	2	3		
株式会社ほくほくフィナンシャルグループ	1,500	1,500	同上	無(注5)
	1	2		

- (注) 1. 純投資目的以外の目的の投資株式の定量的な保有効果については、個別株式ごとに中長期視点に立った円滑な取引・協力関係の維持・強化の観点に資本コストも加味した総合的な観点から検証を取締役会で行い、保有を継続するか判断しているため、個別株式ごとの定量的な保有効果を示すことは困難と考えております。
2. 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社は当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である三井住友信託銀行株式会社は当社株式を保有しております。
3. 株式会社三井住友フィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社三井住友銀行は当社株式を保有しております。
4. 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社三菱UFJ銀行は当社株式を保有しております。
5. 株式会社ほくほくフィナンシャルグループは当社株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社北陸銀行は当社株式を保有しております。

みなし保有株式

該当事項はありません。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

- ④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

- ⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

なお、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)及び事業年度(2018年4月1日から2019年3月31日まで)の連結財務諸表及び財務諸表について、監査法人大手門会計事務所による監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するために、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同機構の行うセミナーへの参加、新会計基準等の情報入手等を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※2 4,249	※2 3,315
受取手形及び売掛金	※3,7 7,612	※3,7 7,559
電子記録債権	※7 1,317	※7 1,647
完成工事未収入金	857	1,902
商品及び製品	1,343	2,956
未成工事支出金	1,350	1,504
原材料及び貯蔵品	10	8
その他	161	374
貸倒引当金	△7	△13
流動資産合計	16,896	19,253
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※2 4,555	※2 4,435
減価償却累計額	△2,462	△2,430
建物及び構築物 (純額)	2,093	2,004
機械装置及び運搬具	425	425
減価償却累計額	△339	△365
機械装置及び運搬具 (純額)	86	59
土地	※2 6,245	※2 6,331
その他	1,597	1,616
減価償却累計額	△1,519	△1,539
その他 (純額)	78	76
有形固定資産合計	8,503	8,473
無形固定資産		
ソフトウェア	28	35
ソフトウェア仮勘定	1	81
その他	0	0
無形固定資産合計	30	117
投資その他の資産		
投資有価証券	※1,2 3,110	※1,2 3,071
繰延税金資産	4	72
保険積立金	770	688
その他	※2 180	※2 186
貸倒引当金	△8	△7
投資その他の資産合計	4,057	4,010
固定資産合計	12,590	12,601
資産合計	29,487	31,854

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※2,7 3,408	※2,7 4,350
電子記録債務	※7 932	※7 969
工事未払金	410	374
短期借入金	※4 1,667	※4 2,999
1年内返済予定の長期借入金	※2,5,6 1,190	※2,5,6 1,160
未払法人税等	435	511
賞与引当金	287	337
その他	743	906
流動負債合計	9,075	11,610
固定負債		
長期借入金	※2,5,6 3,991	※2,5,6 3,647
繰延税金負債	337	363
退職給付に係る負債	118	85
役員株式給付引当金	36	49
その他	228	227
固定負債合計	4,712	4,373
負債合計	13,788	15,983
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,076	2,076
資本剰余金	2,378	2,378
利益剰余金	11,057	12,222
自己株式	△200	△1,037
株主資本合計	15,312	15,639
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	386	236
繰延ヘッジ損益	△0	△4
その他の包括利益累計額合計	386	232
純資産合計	15,698	15,871
負債純資産合計	29,487	31,854

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
売上高	29,076	31,755
売上原価	23,273	25,640
売上総利益	5,803	6,115
販売費及び一般管理費	※1 3,939	※1 4,085
営業利益	1,863	2,029
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	26	36
受取家賃	42	40
持分法による投資利益	166	196
その他	24	33
営業外収益合計	260	306
営業外費用		
支払利息	39	34
株式交付費	9	—
保険解約損	4	27
その他	12	9
営業外費用合計	66	72
経常利益	2,057	2,264
特別利益		
固定資産売却益	—	※2 101
特別利益合計	—	101
特別損失		
固定資産除却損	※3 0	※3 0
投資有価証券評価損	—	8
特別損失合計	0	9
税金等調整前当期純利益	2,057	2,356
法人税、住民税及び事業税	589	660
法人税等調整額	△46	87
法人税等合計	543	748
当期純利益	1,514	1,608
非支配株主に帰属する当期純利益	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	1,514	1,608

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	1,514	1,608
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	168	△150
繰延ヘッジ損益	△0	△3
持分法適用会社に対する持分相当額	△0	△0
その他の包括利益合計	※ 167	※ △153
包括利益	1,682	1,454
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,682	1,454
非支配株主に係る包括利益	—	—

③ 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,854	1,644	9,897	△650	12,744
当期変動額					
新株の発行	222	222	—	—	445
剰余金の配当	—	—	△354	—	△354
親会社株主に帰属する 当期純利益	—	—	1,514	—	1,514
自己株式の取得	—	—	—	△0	△0
自己株式の処分	—	511	—	450	961
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	—	—	—	—	—
当期変動額合計	222	734	1,160	450	2,567
当期末残高	2,076	2,378	11,057	△200	15,312

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	その他の 包括利益累計額合計	
当期首残高	218	△0	218	12,963
当期変動額				
新株の発行	—	—	—	445
剰余金の配当	—	—	—	△354
親会社株主に帰属する 当期純利益	—	—	—	1,514
自己株式の取得	—	—	—	△0
自己株式の処分	—	—	—	961
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	168	△0	167	167
当期変動額合計	168	△0	167	2,735
当期末残高	386	△0	386	15,698

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	2,076	2,378	11,057	△200	15,312
当期変動額					
剰余金の配当	—	—	△443	—	△443
親会社株主に帰属する 当期純利益	—	—	1,608	—	1,608
自己株式の取得	—	—	—	△865	△865
自己株式の処分	—	—	—	27	27
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	—	—	—	—	—
当期変動額合計	—	—	1,164	△837	326
当期末残高	2,076	2,378	12,222	△1,037	15,639

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	その他の 包括利益累計額合計	
当期首残高	386	△0	386	15,698
当期変動額				
剰余金の配当	—	—	—	△443
親会社株主に帰属する 当期純利益	—	—	—	1,608
自己株式の取得	—	—	—	△865
自己株式の処分	—	—	—	27
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	△150	△3	△153	△153
当期変動額合計	△150	△3	△153	172
当期末残高	236	△4	232	15,871

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	2,057	2,356
減価償却費	222	192
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△88	△33
賞与引当金の増減額 (△は減少)	9	50
受取利息及び受取配当金	△26	△36
支払利息及び社債利息	40	34
持分法による投資損益 (△は益)	△166	△196
固定資産除売却損益 (△は益)	0	△100
売上債権の増減額 (△は増加)	△282	△1,321
たな卸資産の増減額 (△は増加)	669	△1,763
未収入金の増減額 (△は増加)	△33	△4
未収消費税等の増減額 (△は増加)	△40	△150
仕入債務の増減額 (△は減少)	327	942
未払金の増減額 (△は減少)	19	3
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△212	18
前受金の増減額 (△は減少)	149	△100
未成工事受入金の増減額 (△は減少)	64	222
預り金の増減額 (△は減少)	14	6
その他	78	4
小計	2,804	125
利息及び配当金の受取額	37	47
利息の支払額	△39	△34
法人税等の支払額	△627	△598
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,174	△460
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△351	△506
有形固定資産の売却による収入	—	401
無形固定資産の取得による支出	△0	△103
保険積立金の積立による支出	△222	△185
保険積立金の払戻による収入	86	252
その他	△35	△8
投資活動によるキャッシュ・フロー	△524	△147

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	267	1,332
長期借入れによる収入	50	870
長期借入金の返済による支出	△1,360	△1,243
社債の償還による支出	△169	—
株式の発行による収入	445	—
自己株式の取得による支出	△0	△865
自己株式の処分による収入	961	13
配当金の支払額	△354	△443
その他	△9	10
財務活動によるキャッシュ・フロー	△168	△326
現金及び現金同等物に係る換算差額	△0	0
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	1,481	△934
現金及び現金同等物の期首残高	2,768	4,249
現金及び現金同等物の期末残高	※ 4,249	※ 3,315

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

全ての子会社を連結しております。

連結子会社の数	3社
連結子会社の名称	イズミ株式会社 旭テック株式会社 ラサ・リアルエステート株式会社

2. 持分法の適用に関する事項

持分法を適用した関連会社の数	1社
会社等の名称	大平洋機工株式会社

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結決算期末日以前1ヶ月の市場価格の平均に基づいて算定された価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法によっております。

② デリバティブ取引 時価法によっております。

③ たな卸資産

商品及び製品

移動平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

未成工事支出金

個別法による原価法によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。

ただし、以下の固定資産については定額法を採用しております。

1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)

ラサ商事株式会社本社ビルに係る建物附属設備及び構築物

2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物

主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 3～50年

機械装置及び運搬具 4～17年

② 無形固定資産(リース資産を除く)

ソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)において定額法による均等償却によっております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員に支給する賞与に充てるため、将来の支給見込額のうち当期の負担額を計上しております。

③ 役員株式給付引当金

「株式交付規程」に基づく役員への当社株式の給付に備えるため、当連結会計年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

当社及び一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法によっております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、工事完成基準を適用しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円換算し、換算差額は損益として処理しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、為替予約については振当処理の要件を満たしている場合は振当処理に、金利スワップについては特例処理の要件を満たしている場合は特例処理によっております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	ヘッジ対象
為替予約	外貨建債権債務等
金利スワップ	借入金利息

③ ヘッジの方針

当社グループの内部規程である「為替管理規程」等に基づき為替相場の変動リスク及び借入金の金利変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。

④ ヘッジの有効性評価の方法

為替予約

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間におけるヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計の両者を比較することにより評価しております。

金利スワップ

金利スワップと対象借入金について次の条件が一致しているため、有効性の評価は省略しております。

- ・金利スワップの想定元本と借入金の元本
- ・金利スワップで受払いされる変動金利の基礎となっているインデックスと借入金の変動金利の基礎となっているインデックス
- ・金利改定のインターバル及び金利改定日
- ・金利スワップの受払いサイクルと借入金の利払日

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、要求払預金及び取得日から3ヶ月以内に満期日の到来する流動性の高い、容易に換金可能であり、かつ、価格の変動について僅少なリスクしか負わない短期的な投資であります。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

- ステップ1：顧客との契約を識別する。
- ステップ2：契約における履行義務を識別する。
- ステップ3：取引価格を算定する。
- ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。
- ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しました。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」150百万円のうちの4百万円は「投資その他の資産」の「繰延税金資産」4百万円として表示しており、「流動資産」の「繰延税金資産」150百万円のうちの145百万円は「固定負債」の「繰延税金負債」337百万円に含めて表示しております。

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度において、「無形固定資産」の「その他」に含めて表示しておりました「ソフトウェア仮勘定」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「無形固定資産」の「その他」に表示していた1百万円は、「ソフトウェア仮勘定」1百万円、「その他」0百万円として組み替えております。

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました「営業外費用」の「社債利息」は金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」に表示していた「社債利息」0百万円、「その他」12百万円は、「その他」12百万円として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「長期前払費用の増減額」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「長期前払費用の増減額」に表示していた4百万円、「その他」74百万円は、「その他」78百万円として組み替えております。

(追加情報)

(業績連動型株式報酬制度)

当社は、2016年6月28日開催の第114期定時株主総会及び2017年6月28日開催の第115期定時株主総会決議に基づき、当社取締役(監査等委員である取締役及び社外取締役を除く。以下同じ。)を対象に、当社の業績及び株式価値と取締役の報酬との連動性をより明確にし、取締役が株主の皆様と株価上昇によるメリット及び株価下落リスクを共有することで、中長期的な業績の向上と企業価値の増大に貢献する意識を高めることを目的として、業績連動型株式報酬制度を導入しております。なお本制度は2019年7月に当初の信託期間の期限が到来するため、期限を2022年7月末まで3年延長することを2019年6月26日の取締役会にて決議しております。

① 取引の概要

本制度は、当社が金銭を拠出することにより設定する信託(以下「本信託」という。)が当社株式を取得し、当社取締役会が定める株式交付規程に従って、その役位及び業績達成度(中期経営計画の連結当期純利益目標達成率)に応じて付与されるポイントの数に相当する数の当社株式が、本信託を通じて各取締役に對して交付されるという業績連動型の株式報酬制度であります。なお、取締役が当社株式の交付を受ける時期は、原則として取締役の退任時となります。

② 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当連結会計年度末1億36百万円、234,083株であります。

③ 総額法の適用により計上された借入金の帳簿価額

該当事項はありません。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	1,763百万円	1,948百万円

※2 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
現金及び預金	2百万円	2百万円
建物及び構築物	1,935 "	1,835 "
土地	5,407 "	5,125 "
投資有価証券	86 "	72 "
その他(投資その他の資産)	5 "	5 "
合計	7,436百万円	7,041百万円

上記に対応する債務

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
支払手形及び買掛金	604百万円	558百万円
1年内返済予定の長期借入金	373 "	655 "
長期借入金	3,365 "	2,710 "
合計	4,343百万円	3,924百万円

※3 受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形裏書譲渡高	94百万円	90百万円

- ※4 当社及び連結子会社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行9行と当座貸越契約を締結しております。連結会計年度末における当座貸越契約に係る借入金未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額	8,010百万円	8,850百万円
借入実行残高	1,667 "	2,499 "
差引額	6,342百万円	6,350百万円

- ※5 子会社ラサ・リアルエステート株式会社は、運転資金の安定的な調達のため、取引銀行2行とシンジケートローンを締結しております。この契約に基づく当連結会計年度末の借入未実行残高は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
貸出タームローンの総額	1,300百万円	1,300百万円
借入実行残高	1,190 "	1,150 "
差引額	110百万円	150百万円

※6 財務制限条項

子会社ラサ・リアルエステート株式会社の長期借入金790百万円(うち1年内返済予定の長期借入金30百万円)について、以下の財務制限条項が付されております。

- (1) 2016年3月期以降、各決算期末における連帯保証人(当社)の連結の貸借対照表において、純資産の部の合計額又は前年度決算期の末日における純資産の部の合計額のいずれか大きい方の80%以上に維持すること。
- (2) 2016年3月期以降、各決算期末における連帯保証人(当社)の連結の損益計算書に記載される経常損益を2期連続して損失としないこと。
- (3) 2016年3月期以降、各決算期末における単体の損益計算書に記載される経常損益を2期連続して損失としないこと。

- ※7 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が、期末残高に含まれておりません。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	95百万円	137百万円
電子記録債権	49 "	35 "
支払手形	189 "	258 "
電子記録債務	193 "	207 "

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料及び手当	1,173百万円	1,171百万円
賞与引当金繰入額	242 "	273 "
退職給付費用	58 "	67 "
貸倒引当金繰入額	— "	6 "

※2 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	—百万円	22百万円
機械装置及び運搬具	— "	0 "
その他(工具、器具及び備品)	— "	0 "
土地	— "	78 "
計	—百万円	101百万円

※3 固定資産除却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	—百万円	0百万円
機械装置及び運搬具	0 "	— "
その他(工具、器具及び備品)	0 "	0 "
計	0百万円	0百万円

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	243百万円	△209百万円
組替調整額	— 〃	△8 〃
税効果調整前	243 〃	△217 〃
税効果額	△75 〃	67 〃
その他有価証券評価差額金	168 〃	△150 〃
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	△0 〃	△5 〃
組替調整額	— 〃	— 〃
税効果調整前	△0 〃	△5 〃
税効果額	0 〃	1 〃
繰延ヘッジ損益	△0 〃	△3 〃
持分法適用会社に対する持分相当額		
当期発生額	△0 〃	△0 〃
その他の包括利益合計	167百万円	△153百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	12,400,000	510,000	—	12,910,000

(注) (変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

公募増資による増加 300,000株
 オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資による増加 210,000株

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,526,306	59	1,100,000	426,365

(注) 1. 自己株式には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式282,000株が含まれております。

2. (変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

端株買付による増加 59株
 2017年11月16日の取締役会決議に基づく公募による自己株式の処分による減少 1,100,000株

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月28日 定時株主総会	普通株式	185	16.50	2017年3月31日	2017年6月29日
2017年10月30日 取締役会	普通株式	168	15.00	2017年9月30日	2017年12月4日

(注) 2017年6月28日定時株主総会決議による配当金の総額及び2017年10月30日取締役会決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式に対する配当金がそれぞれ4百万円ずつ含まれております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度後となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	231	18.00	2018年3月31日	2018年6月28日

(注) 2018年6月27日定時株主総会決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式に対する配当金5百万円が含まれております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	12,910,000	—	—	12,910,000

2. 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	426,365	940,002	47,917	1,318,450

(注) 1. 自己株式には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式234,083株が含まれております。

2. (変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

端株買付による増加	2株
2018年11月27日の取締役会決議に基づく自己株式立会外取引による増加	940,000株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

役員向け株式交付信託からの交付による減少	47,917株
----------------------	---------

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	231	18.00	2018年3月31日	2018年6月28日
2018年10月30日 取締役会	普通株式	212	16.50	2018年9月30日	2018年12月6日

(注) 1. 2018年6月27日定時株主総決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する自社の株式に対する配当金5百万円が含まれております。

2. 2018年10月30日取締役会決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する自社の株式に対する配当金4百万円が含まれております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度後となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	208	17.50	2019年3月31日	2019年6月27日

(注) 2019年6月26日定時株主総決議による配当金の総額には、役員向け株式交付信託が保有する当社株式に対する配当金4百万円が含まれております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金	4,249百万円	3,315百万円
現金及び現金同等物	4,249百万円	3,315百万円

(リース取引関係)

ファイナンスリース取引

(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産 産機・建機関連における事業機器(機械及び装置)等であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、主に設備投資や仕入れ等の事業計画に照らして、必要な中長期資金(主に銀行借入や社債発行)を調達しております。余資が発生した場合には、安全性の高い金融資産(短期的な預金等)で運用し、また短期的な運転資金については、銀行借入及び手許流動性の範囲で対応しております。デリバティブは中長期借入資金のコスト固定化、為替変動リスクのヘッジ等のために行っており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は、顧客の信用リスクがあります。また、グローバルに事業を展開していることから生じている外貨建ての営業債権は為替変動リスクがありますが、外貨建ての営業債務に比しリスクは僅少であります。投資有価証券は、取引先企業との業務又は、関連企業との資本提携等に関連する株式等であり、市場価格の変動リスクがあります。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務は、通常1年以内の支払期日であります。またその一部には、資源等輸入に伴う外貨建てのものがあり、為替変動リスクがありますが、原則、先物為替予約を利用してヘッジしております。借入金は、主に運転、設備投資等に必要な資金の調達を目的としたものであり、返済日は決算日後、最長で15年であります。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジの方針、ヘッジの有効性の評価方法等については「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」の「4. 会計方針に関する事項 (7) 重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりです。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク(取引先の契約不履行等にかかるリスク)の管理

- ・当社グループは、「経理規程」「販売管理規程」「与信管理規程」に従い、営業債権について、各事業部門における営業担当部署が取引先の状況をモニタリングし、取引相手毎に期日及び残高を管理するとともに、報告体制を構築し財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。
- ・デリバティブ取引の利用にあたっては、主に、主要な本邦金融機関を相手に行っており、カウンターパーティーリスクを軽減しております。
- ・当連結会計年度の決算日現在における最大信用リスク額は、信用リスクがある資産の貸借対照表価額により表されております。

② 市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

- ・当社グループは、外貨建ての営業債権債務について、原則、個別取引毎に先物為替予約を利用してヘッジを行うことで為替変動リスクの軽減を図っております。また、必要に応じ、借入金等に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しております。
- ・投資有価証券については、定期的に時価や発行体(取引先企業)の財務状況等を把握し、また満期保有目的の債券以外のものについては、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。
- ・デリバティブ取引については、「為替管理規程」や、「資金調達・運用取扱要領」において取扱方針等を定めるとともに、「リスクヘッジ目的以外のデリバティブ取引を行ってはならない」旨制定し運営しております。またその管理は、経理部において行っております。

③ 流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社グループは、各部署からの報告に基づき経理部が定期的に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性を一定レベルに維持することで、当該リスクを管理しております。

④ 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

また、「2. 金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次の表には含めておりません。

((注2)をご参照ください。)

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	4,249	4,249	—
(2) 受取手形及び売掛金	7,612	7,612	—
(3) 電子記録債権	1,317	1,317	—
(4) 完成工事未収入金	857	857	—
(5) 投資有価証券 その他有価証券	1,160	1,160	—
資産計	15,198	15,198	—
(1) 支払手形及び買掛金	3,408	3,408	—
(2) 電子記録債務	932	932	—
(3) 工事未払金	410	410	—
(4) 短期借入金	1,667	1,667	—
(5) 長期借入金※	5,181	5,204	23
負債計	11,600	11,623	23
デリバティブ取引	—	—	—

※ 支払期日が1年以内となったことにより、流動負債に計上されているものについては、本表では長期借入金として表示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金及び預金	3,315	3,315	—
(2) 受取手形及び売掛金	7,559	7,559	—
(3) 電子記録債権	1,647	1,647	—
(4) 完成工事未収入金	1,902	1,902	—
(5) 投資有価証券 その他有価証券	936	936	—
資産計	15,361	15,361	—
(1) 支払手形及び買掛金	4,350	4,350	—
(2) 電子記録債務	969	969	—
(3) 工事未払金	374	374	—
(4) 短期借入金	2,999	2,999	—
(5) 長期借入金※	4,808	4,839	31
負債計	13,501	13,532	31
デリバティブ取引	—	—	—

※ 支払期日が1年以内となったことにより、流動負債に計上されているものについては、本表では長期借入金として表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 受取手形及び売掛金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 電子記録債権

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 完成工事未収入金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(5) 投資有価証券

時価については、株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記をご参照ください。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 電子記録債務

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 工事未払金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(4) 短期借入金

短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(5) 長期借入金

長期借入金の時価については、取引金融機関から提示された価格又は、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割引いて算定する方法によっております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、(デリバティブ取引関係)をご覧ください。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区 分	2018年3月31日	2019年3月31日
関係会社株式(非上場株式)	1,763	1,948
その他有価証券(非上場株式)	185	185

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(5) 投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	4,249	—	—	—
受取手形及び売掛金	7,612	—	—	—
電子記録債権	1,317	—	—	—
完成工事未収入金	857	—	—	—
合計	14,037	—	—	—

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	3,315	—	—	—
受取手形及び売掛金	7,559	—	—	—
電子記録債権	1,647	—	—	—
完成工事未収入金	1,902	—	—	—
合計	14,424	—	—	—

(注4) 金銭債務の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	1,667	—	—	—	—	—
長期借入金	1,190	948	341	559	118	2,023
合計	2,857	948	341	559	118	2,023

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	2,999	—	—	—	—	—
長期借入金	1,160	553	771	282	133	1,905
合計	4,160	553	771	282	133	1,905

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,066	460	606
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,066	460	606
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	94	117	△22
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	94	117	△22
合計		1,160	577	583

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	839	447	391
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	839	447	391
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	97	123	△26
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	97	123	△26
合計		936	571	365

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(1) 通貨関連

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	
為替予約等の振当処理	為替予約取引					
	買建					
	米ドル	買掛金	192	—	(注)	
	ユーロ	〃	11	—		
	豪ドル	〃	2	—		
	スイスフラン	〃	7	—		
	売建					
	米ドル	売掛金	194	—		
	豪ドル	〃	0	—		
NZドル	〃	0	—			
合計			408	—		

(注) 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている買掛金及び売掛金と一体として処理されているため、その時価は、当該買掛金及び売掛金の時価に含めて記載しております。

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	
為替予約等のヘッジ処理	為替予約取引					
	買建					
	米ドル	買掛金	594	—	587	
	ユーロ	〃	80	—	79	
	豪ドル	〃	29	—	31	
	売建					
	米ドル	売掛金	260	—	256	
ユーロ	〃	35	—	34		
合計			1,000	—	988	

(注) 時価の算定方法 取引金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 金利関連

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・ 受取変動	長期借入金	1,246	1,157	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(1) 通貨関連

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
為替予約等の振当処理	為替予約取引 買建				
	米ドル	買掛金	608	—	(注)
	ユーロ	〃	11	—	
	豪ドル	〃	17	—	
	スイスフラン	〃	2	—	
	売建				
米ドル	売掛金	190	—		
合計			830	—	

(注) 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている買掛金及び売掛金と一体として処理されているため、その時価は、当該買掛金及び売掛金の時価を含めて記載しております。

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価	
為替予約等のヘッジ処理	為替予約取引 買建					
	米ドル	買掛金	434	—	433	
	ユーロ	〃	176	—	172	
	豪ドル	〃	54	—	53	
	売建					
	米ドル	売掛金	176	—	176	
ユーロ	〃	7	—	7		
合計			850	—	844	

(注) 時価の算定方法 取引金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 金利関連

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・ 受取変動	長期借入金	1,157	1,069	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価を含めて記載しております。

(退職給付関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、退職一時金制度を設けており、当社は確定給付企業年金制度、連結子会社は退職金制度として、また、退職金制度の内枠として、中小企業退職金共済制度に加入しております。また、当社及び連結子会社は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

退職給付に係る負債の期首残高	206百万円
退職給付費用	58 "
退職給付の支払額	△55 "
制度への拠出額	△90 "
退職給付に係る負債の期末残高	118 "

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	723百万円
年金資産	△605 "
	118 "
非積立型制度の退職給付債務	— "
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	118 "
退職給付に係る負債	118 "
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	118 "

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用	58百万円
----------------	-------

3. 確定拠出制度

当社の連結子会社の確定拠出制度(中小企業退職金共済制度)への要拠出額は、1百万円であります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、退職一時金制度を設けており、当社は確定給付企業年金制度、連結子会社は退職金制度として、また、退職金制度の内枠として、中小企業退職金共済制度に加入しております。また、当社及び連結子会社は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

退職給付に係る負債の期首残高	118百万円
退職給付費用	67 "
退職給付の支払額	△10 "
制度への拠出額	△90 "
退職給付に係る負債の期末残高	85 "

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	754百万円
年金資産	△669 "
	85 "
非積立型制度の退職給付債務	— "
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	85 "
退職給付に係る負債	85 "
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	85 "

(3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用	67百万円
----------------	-------

3. 確定拠出制度

当社の連結子会社の確定拠出制度(中小企業退職金共済制度)への要拠出額は、1百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	15	23
賞与引当金	89	106
商品評価損	6	7
退職給付に係る負債	37	27
役員株式給付引当金	11	15
その他	147	89
小計	307	268
評価性引当額	△7	△7
繰延税金資産合計	300	260
繰延税金負債		
土地評価差額	△451	△392
その他有価証券評価差額金	△181	△113
圧縮積立金	—	△46
その他	△0	△0
繰延税金負債合計	△632	△552
繰延税金資産(負債)の純額	△332	△291

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	(単位：%)	
	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9	—
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.0	—
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.2	—
住民税均等割等	0.7	—
評価性引当額	△4.4	—
持分法による投資損益	△2.5	—
その他	0.9	—
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.4	—

(注) 当連結会計年度は、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。

(資産除去債務関係)

当社は、支社等オフィスの不動産賃貸契約に基づき、オフィスの退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが、当該債務に関連する賃貸資産の使用期間が明確でなく、将来支社等を移転する予定もないことから、資産除去債務を合理的に見積ることが困難であります。そのため、当該債務に見合う資産除去債務を計上しておりません。

(賃貸等不動産関係)

当社グループは、首都圏内において、賃貸用のオフィスビル(土地を含む)を所有しております。

当該賃貸等不動産に関する損益については、セグメント別の状況をご覧ください。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

			前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
賃貸等不動産	連結貸借対照表計上額	期首残高	4,983	5,993
		期中増減額	1,009	8
		期末残高	5,993	6,001
	期末時価		5,464	5,916
賃貸等不動産として 使用される 部分を含む不動産	連結貸借対照表計上額	期首残高	—	—
		期中増減額	—	—
		期末残高	—	—
	期末時価		—	—

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得価額から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。
2. 期中増減額は、主に賃貸等不動産の買換えに伴うものであります。
3. 不動産の期末時価は、主に「不動産鑑定評価額」及び「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額(指標等を用いて調整を行ったものを含む。)によっております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務諸表が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、当社及び子会社を取り扱う製品・サービスについて国内及び海外の包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

従って、当社グループの製品・サービス別セグメントから構成されており、「資源・金属素材関連」「産機・建機関連」「環境設備関連」「プラント・設備工事関連」「化成品関連」「不動産賃貸関連」の6事業を報告セグメントとしております。

「資源・金属素材関連」

ジルコンサンドを中心とする鉱産物、その他物資等の輸出入及び販売を行っております。

「産機・建機関連」

広範囲の流体に対応できる流送機器等の販売・メンテナンス等やシールド掘進機及び小型削岩機などの各種建設機械の販売・レンタル・メンテナンス等を行っております。

「環境設備関連」

ドイツより高圧ポンプ類を輸入し、下水汚泥・産業廃棄物処理施設向けに販売を行っております。また、当社が独自技術を保有する水砕スラグ製造設備(ラサ・システム)の販売及びこれらの改修・改造を行っております。

「プラント・設備工事関連」

石油精製、石油化学、ガス関連、クリーンルーム関連、各種工事関連、都市部大型空調設備関連等の多種多様な分野のプラント及び関連設備工事に係る設計、施工及びメンテナンス工事を主たる事業としております。

「化成品関連」

自動車、建材、電気、電子分野などの幅広い業界に多種多様な合成樹脂・化学製品を販売しております。

「不動産賃貸関連」

当社グループで保有する不動産を有効活用し、堅実かつ優良なテナントへ賃貸しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						合計
	資源・金属 素材関連	産機・建機 関連	環境設備 関連	プラント ・設備 工事関連	化成品 関連	不動産賃貸 関連	
売上高							
外部顧客への売上高	9,142	7,911	1,353	3,843	6,613	212	29,076
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	44	—	10	—	121	176
計	9,142	7,955	1,353	3,853	6,613	333	29,252
セグメント利益	428	790	145	185	159	154	1,863
セグメント資産	3,304	3,629	552	4,930	2,565	6,897	21,878
その他の項目							
減価償却費	0	23	1	94	4	63	188
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	0	42	—	35	—	325	403

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						合計
	資源・金属 素材関連	産機・建機 関連	環境設備 関連	プラント ・設備 工事関連	化成品 関連	不動産賃貸 関連	
売上高							
外部顧客への売上高	9,562	8,757	1,567	5,029	6,608	230	31,755
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	0	—	7	—	121	130
計	9,562	8,758	1,567	5,037	6,608	352	31,885
セグメント利益	437	770	237	265	145	173	2,029
セグメント資産	5,014	3,821	524	5,838	2,649	6,665	24,513
その他の項目							
減価償却費	0	23	0	83	4	61	173
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	0	42	—	11	3	464	520

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の内容(差異調整に関する事項)

(単位：百万円)

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	29,252	31,885
セグメント間取引消去	△176	△130
連結財務諸表の売上高	29,076	31,755

(単位：百万円)

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	1,863	2,029
セグメント間取引消去	△0	△0
その他	0	0
連結財務諸表の営業利益	1,863	2,029

(単位：百万円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	21,878	24,513
全社資産(注)	7,608	7,341
連結財務諸表の資産合計	29,487	31,854

(注) 全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない現預金、投資有価証券等であります。

(単位：百万円)

その他の項目	報告セグメント計		調整額(注)		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費	188	173	33	19	222	192
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	403	520	2	117	406	638

(注) 調整額は、報告セグメントに含まれない土地や建物、システム等であります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	北米	その他	合計
25,152	3,231	165	527	29,075

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額のほぼ100%であるため、記載を省略しております。

3. 主な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア	北米	その他	合計
27,415	3,770	129	439	31,753

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額のほぼ100%であるため、記載を省略しております。

3. 主な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
関連会社	大平洋機工(株)	千葉県 習志野市	490	機械製造	直接 45.5	ポンプ類の購 入及び原材料 の販売 役員 の兼任1名	ポンプ類の 購入	2,536	電子記録債務	932
									買掛金	333

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ① 取引金額には、消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。
- ② ポンプ類の購入価格については、市場価格の動向及び大平洋機工株式会社より提示された製品別原価算定を勘案して交渉のうえ毎期決定しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
関連会社	大平洋機工(株)	千葉県 習志野市	490	機械製造	直接 45.5	ポンプ類の購 入及び原材料 の販売 役員 の兼任1名	ポンプ類の 購入	2,601	電子記録債務	969
									買掛金	356

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- ① 取引金額には、消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。
- ② ポンプ類の購入価格については、市場価格の動向及び大平洋機工株式会社より提示された製品別原価算定を勘案して交渉のうえ毎期決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,257円55銭	1,369円24銭
1株当たり当期純利益金額	133円42銭	132円41銭

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 役員向け株式交付信託が保有する当社株式を、1株当たり純資産額の算定上、期末発行済株式総数から控除する自己株式に含めております(前連結会計年度 282千株、当連結会計年度 234千株)。また、1株当たり当期純利益金額の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております(前連結会計年度 282千株、当連結会計年度 257千株)。
3. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	1,514	1,608
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	1,514	1,608
普通株式の期中平均株式数(千株)	11,352	12,146

4. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	15,698	15,871
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	—	—
(うち非支配株主持分)	—	—
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	15,698	15,871
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	12,483	11,591

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,667	2,999	0.3	—
1年以内に返済予定の長期借入金	1,190	1,160	0.5	—
1年以内に返済予定のリース債務	11	11	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く。)	3,991	3,647	0.5	2020年6月～ 2034年3月
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。)	37	25	—	—
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	6,898	7,845	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(一年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は次のとおりです。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	553	771	282	133
リース債務	11	11	2	—

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	6,904	14,761	22,626	31,755
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(百万円)	357	805	1,441	2,356
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益金額(百万円)	191	506	910	1,608
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	15.32	40.56	73.96	132.41

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	15.32	25.23	33.52	60.18

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,623	1,961
受取手形	※1,4 1,347	※1,4 1,166
電子記録債権	※1,4 836	※1,4 1,018
売掛金	※1 4,520	※1 4,857
商品	1,308	2,893
原材料及び貯蔵品	8	6
前渡金	6	37
前払費用	28	27
未収入金	2	※1 4
未収消費税等	—	193
その他	※1 4	※1 9
貸倒引当金	△0	△0
流動資産合計	10,685	12,175
固定資産		
有形固定資産		
建物	122	121
構築物	9	8
機械及び装置	12	11
車両運搬具	0	0
工具、器具及び備品	17	30
土地	464	464
リース資産	34	25
貸与資産	4	2
有形固定資産合計	665	664
無形固定資産		
ソフトウェア	18	28
ソフトウェア仮勘定	1	80
その他	0	0
無形固定資産合計	20	108
投資その他の資産		
投資有価証券	1,221	1,017
関係会社株式	4,739	4,739
長期貸付金	※1 583	※1 582
破産更生債権等	1	0
長期前払費用	7	10
繰延税金資産	4	70
保険積立金	731	641
会員権	14	13
差入保証金	※1 60	※1 60
敷金及び保証金	※1 155	※1 162
貸倒引当金	△8	△7
投資その他の資産合計	7,511	7,291
固定資産合計	8,197	8,065
資産合計	18,882	20,241

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	※4 531	※4 537
電子記録債務	※1,4 932	※1,4 969
買掛金	※1 1,268	※1 2,141
短期借入金	※3 720	※3 1,570
1年内返済予定の長期借入金	758	447
リース債務	8	8
未払金	138	139
未払法人税等	378	393
未払消費税等	47	22
前受金	159	98
預り金	35	34
賞与引当金	230	259
その他	※1 13	※1 24
流動負債合計	5,222	6,645
固定負債		
長期借入金	367	736
リース債務	28	19
退職給付引当金	93	55
役員株式給付引当金	36	49
その他	24	24
固定負債合計	550	885
負債合計	5,772	7,531
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,076	2,076
資本剰余金		
資本準備金	1,835	1,835
その他資本剰余金	541	541
資本剰余金合計	2,376	2,376
利益剰余金		
利益準備金	114	114
その他利益剰余金		
別途積立金	7,000	7,500
繰越利益剰余金	1,368	1,445
利益剰余金合計	8,482	9,059
自己株式	△184	△1,022
株主資本合計	12,751	12,490
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	360	223
繰延ヘッジ損益	△1	△3
評価・換算差額等合計	358	219
純資産合計	13,110	12,710
負債純資産合計	18,882	20,241

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
売上高	18,451	19,887
売上原価	※1 13,701	※1 14,964
売上総利益	4,749	4,923
販売費及び一般管理費	※2 3,385	※2 3,477
営業利益	1,364	1,445
営業外収益		
受取利息及び配当金	34	46
受取家賃	34	33
その他	21	29
営業外収益合計	90	110
営業外費用		
支払利息	10	7
社債利息	0	—
株式交付費	9	—
保険解約損	4	27
敷金償却	5	—
その他	1	6
営業外費用合計	31	40
経常利益	1,423	1,514
特別利益		
固定資産売却益	—	0
特別利益合計	—	0
特別損失		
固定資産除却損	0	0
投資有価証券評価損	—	8
特別損失合計	0	9
税引前当期純利益	1,423	1,505
法人税、住民税及び事業税	439	489
法人税等調整額	20	△4
法人税等合計	460	485
当期純利益	962	1,020

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	1,854	1,612	30	1,642	114	6,500	1,259	7,874
当期変動額								
新株の発行	222	222	—	222	—	—	—	—
剰余金の配当	—	—	—	—	—	—	△354	△354
当期純利益	—	—	—	—	—	—	962	962
別途積立金の積立	—	—	—	—	—	500	△500	—
自己株式の取得	—	—	—	—	—	—	—	—
自己株式の処分	—	—	511	511	—	—	—	—
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	—	—	—	—	—	—	—	—
当期変動額合計	222	222	511	734	—	500	108	608
当期末残高	2,076	1,835	541	2,376	114	7,000	1,368	8,482

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△635	10,735	203	△0	203	10,938
当期変動額						
新株の発行	—	445	—	—	—	445
剰余金の配当	—	△354	—	—	—	△354
当期純利益	—	962	—	—	—	962
別途積立金の積立	—	—	—	—	—	—
自己株式の取得	△0	△0	—	—	—	△0
自己株式の処分	450	961	—	—	—	961
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	—	—	156	△0	155	155
当期変動額合計	450	2,015	156	△0	155	2,171
当期末残高	△184	12,751	360	△1	358	13,110

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金	繰越利益 剰余金	
		別途積立金						
当期首残高	2,076	1,835	541	2,376	114	7,000	1,368	8,482
当期変動額								
新株の発行	—	—	—	—	—	—	—	—
剰余金の配当	—	—	—	—	—	—	△443	△443
当期純利益	—	—	—	—	—	—	1,020	1,020
別途積立金の積立	—	—	—	—	—	500	△500	—
自己株式の取得	—	—	—	—	—	—	—	—
自己株式の処分	—	—	—	—	—	—	—	—
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	—	—	—	—	—	—	—	—
当期変動額合計	—	—	—	—	—	500	76	576
当期末残高	2,076	1,835	541	2,376	114	7,500	1,445	9,059

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△184	12,751	360	△1	358	13,110
当期変動額						
新株の発行	—	—	—	—	—	—
剰余金の配当	—	△443	—	—	—	△443
当期純利益	—	1,020	—	—	—	1,020
別途積立金の積立	—	—	—	—	—	—
自己株式の取得	△865	△865	—	—	—	△865
自己株式の処分	27	27	—	—	—	27
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	—	—	△136	△2	△138	△138
当期変動額合計	△837	△260	△136	△2	△138	△399
当期末残高	△1,022	12,490	223	△3	219	12,710

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法によっております。

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日以前1ヶ月の市場価格の平均に基づいて算定された価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

時価のないもの

移動平均法による原価法によっております。

2. デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法によっております。

3. たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品

移動平均法による原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。

ただし、以下の固定資産については定額法を採用しております。

1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)

ラサ商事株式会社本社ビルに係る建物附属設備及び構築物

2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物

主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 3～50年

工具、器具及び備品 4～20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

ソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)において定額法による均等償却によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

5. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円換算し、換算差額は損益として処理しております。

6. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に支給する賞与に充てるため、将来の支給見込額のうち、当期の負担額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

退職給付引当金及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法によっております。

(4) 役員株式給付引当金

「株式交付規程」に基づく役員への当社株式の給付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

7. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、為替予約については振当処理の要件を満たしている場合は振当処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段	ヘッジ対象
為替予約	外貨建債権債務等

(3) ヘッジの方針

当社の内部規程である「為替管理規程」等に基づき為替相場の変動リスクを一定の範囲内でヘッジしております。

(4) ヘッジの有効性評価の方法

為替予約

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間におけるヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計の両者を比較することにより評価しております。

8. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しました。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」123百万円及び「固定負債」の「繰延税金負債」118百万円は「固定資産」の「繰延税金資産」4百万円に含めて表示しております。

(貸借対照表関係)

前事業年度において、「無形固定資産」の「その他」に含めて表示しておりました「ソフトウェア仮勘定」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「無形固定資産」の「その他」に表示していた1百万円は、「ソフトウェア仮勘定」1百万円、「その他」0百万円として組み替えております。

(追加情報)

(業績連動型株式報酬制度)

連結財務諸表「注記事項(追加情報)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	23百万円	43百万円
長期金銭債権	742 "	742 "
短期金銭債務	1,273 "	1,326 "

2 偶発債務

子会社の仕入債務及び金融機関からの借入債務に対し、保証を行っております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
イズミ株式会社	－百万円	29百万円
ラサ・リアルエステート株式会社	3,453 "	3,253 "

※3 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行6行と当座貸越契約を締結しております。
これらの契約に基づく当事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額	3,860百万円	4,700百万円
借入実行残高	720 "	1,570 "
差引額	3,140百万円	3,130百万円

※4 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。
なお、期末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が、期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	95百万円	134百万円
電子記録債権	48 "	29 "
支払手形	81 "	159 "
電子記録債務	193 "	207 "

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
仕入高	2,547百万円	2,608百万円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料及び手当	986百万円	968百万円
賞与引当金繰入額	226 "	253 "
退職給付費用	51 "	59 "
減価償却費	48 "	33 "
貸倒引当金繰入額	－	0
おおよその割合		
販売費	9%	9%
一般管理費	91%	91%

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載していません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

(単位：百万円)

区 分	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	3,954	3,954
関連会社株式	785	785

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
未払事業税	12	12
賞与引当金	70	79
商品評価損	6	7
退職給付引当金	28	17
役員株式給付引当金	11	15
その他	69	71
小計	198	203
評価性引当額	△34	△34
繰延税金資産合計	163	169
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△159	△98
繰延税金負債合計	△159	△98
繰延税金資産の純額	4	70

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

(単位：%)

	前事業年度 (2018年3月31日現在)	当事業年度 (2019年3月31日現在)
法定実効税率	30.9	30.6
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.0	1.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.3	△0.4
住民税均等割	0.9	0.8
評価性引当額	△0.2	△0.0
その他	0.1	△0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	32.3	32.2

(資産除去債務関係)

当社は、支社オフィス等の不動産賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが、当該債務に関連する賃借資産の使用期間が明確でなく、将来支社等を移転する予定も無いことから、資産除去債務を合理的に見積もることができません。そのため、当該債務に見合う資産除去債務を計上していません。

④ 【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	期首 帳簿価額	当期 増加額	当期 減少額	当期 償却額	期末 帳簿価額	減価償却 累計額
有形 固定 資産	建物	122	8	0	8	121	381
	構築物	9	—	—	0	8	96
	機械及び装置	12	—	—	1	11	112
	車両運搬具	0	—	0	0	0	5
	工具、器具及び備品	17	24	0	11	30	82
	土地	464	—	—	—	464	—
	リース資産	34	—	—	8	25	15
	貸与資産	4	—	0	1	2	1,386
	計	665	32	0	32	664	2,081
無固 定資 産形 資産	ソフトウェア	18	20	—	10	28	282
	その他	1	78	—	—	80	—
	計	20	99	—	10	108	282

【引当金明細表】

(単位：百万円)

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
貸倒引当金	9	0	1	7
賞与引当金	230	259	230	259
役員株式給付引当金	36	40	27	49

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

記載事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	—
公告掲載新聞名	当社の公告は、電子公告により行います。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行います。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりであります。 http://www.rasaco.co.jp
株主に対する特典	毎年3月末日現在における株主名簿に記載又は記録された100株以上所有の株主に対し、下記のとおり優待品を贈呈しております。 1. 1年以上継続保有の株主 当社オリジナルQUOカード1,000円相当 2. 1年未満の株主 当社オリジナルQUOカード 500円相当 なお、上記に加え下記の寄付しております。 3. 「公益財団法人 緑の地球防衛基金」へ株主1人あたり50円 4. 「認定NPO法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会」へ株主1人あたり60円

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類、確認書

事業年度 第116期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月27日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書

事業年度 第116期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月27日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書、確認書

事業年度 第117期第1四半期（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月10日関東財務局長に提出

事業年度 第117期第2四半期（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月9日関東財務局長に提出

事業年度 第117期第3四半期（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月8日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく
臨時報告書

2018年6月28日関東財務局長に提出

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間（自 2018年11月1日 至 2018年11月30日）2018年12月13日関東財務局長に提出

(6) 有価証券報告書の訂正報告書及び有価証券報告書の訂正報告書の確認書

事業年度 第116期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年11月9日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月26日

ラサ商事株式会社
取締役会 御中

監査法人 大手門会計事務所

指定社員
業務執行社員 公認会計士 中 村 尋 人 ㊞

指定社員
業務執行社員 公認会計士 亀 ケ 谷 顕 ㊞

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているラサ商事株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ラサ商事株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、ラサ商事株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、ラサ商事株式会社は2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

ラサ商事株式会社
取締役会 御中

監査法人 大手門会計事務所

指定社員 公認会計士 中 村 尋 人 ㊞
業務執行社員

指定社員 公認会計士 亀 ヶ 谷 顕 ㊞
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているラサ商事株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第117期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、ラサ商事株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月26日

【会社名】 ラサ商事株式会社

【英訳名】 Rasa Corporation

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 井村周一

【最高財務責任者の役職氏名】 常務取締役管理本部長 窪田義広

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目11番5号 RASA日本橋ビルディング

【縦覧に供する場所】 株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
ラサ商事株式会社 大阪支店
(大阪市北区中之島二丁目2番2号 大阪中之島ビル)
ラサ商事株式会社 名古屋支店
(名古屋市中区錦町一丁目11番20号 大永ビル)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

当社代表取締役社長井村周一及び常務取締役管理本部長窪田義広は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について(意見書)」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、同上意見書に示されている内部統制の評価の基準及び実施基準に基づき、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(全社的な内部統制)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社3社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、財務報告に対する金額的及び質的影響の重要性を考慮し、全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、前連結会計年度の連結売上高を指標に、概ね2/3の割合に達している事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及びたな卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、財務報告への影響を勘案して、重要性の大きい業務プロセスについては、個別に評価の対象に追加しました。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当連結会計年度末日時点において、当社代表取締役社長井村周一及び常務取締役管理本部長窪田義広は、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2019年6月26日

【会社名】 ラサ商事株式会社

【英訳名】 Rasa Corporation

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 井村周一

【最高財務責任者の役職氏名】 常務取締役管理本部長 窪田義広

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目11番5号 RASA日本橋ビルディング

【縦覧に供する場所】 株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

ラサ商事株式会社 大阪支店
(大阪市北区中之島二丁目2番2号 大阪中之島ビル)

ラサ商事株式会社 名古屋支店
(名古屋市中区錦一丁目11番20号 大永ビル)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長井村周一及び当社最高財務責任者窪田義広は、当社の第117期(自2018年4月1日 至2019年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。

